

「場についての試論」

山下裕子

I 導入

1 「場」の場所：^{トポス}世紀末ウィーン

場の概念は、19世紀末から20世紀初頭にかけての大陸ヨーロッパ思想における科学の方法論をめぐる革命と深い関わりを持つ。「場」という概念を再発見したのは、19世紀から20世紀にかけての物理学であり、それは19世紀中葉に隆盛を極めたデカルト・ニュートンの合理主義・物理学主義に替わる方法の模索において発見されたのである。世紀末のヨーロッパでは、19世紀半ばまでの、科学至上主義的、実証主義的、機械論的傾向に対する反動が、様々な研究領域で同時多発的に展開された。1890年から1930年までのヨーロッパ社会思想の分析を行った思想家スチュアート・ヒューズは、1890年代を「実証主義への反逆」の時代と呼んだ。¹⁾

そして、この実証主義への反逆の台風の目となったのが、世紀末ウィーンを中心とする旧ハプスブルグ帝国圏の知的階級であり、その活躍は様々な領域に及んでいたが、合理主義、客観主義に対する主観主義を唱えた点で不思議に統一されていた。物理学のマッハはプラハにあった。ウィーンのヴィトゲンシュタイン、精神分析学のフロイト、やがてゲシュタルト心

理学につながるブレンターノはウィーン大学で教鞭を取り、オスカー・クラウス、エーレンフェルスらを育てた。同じく、ブレンターノに師事し、マッハに強い影響を受けたと言われるフッサールはウィーンに学んだ後、現象学を設立している。また、経済学では、カール・メンガーを始祖として、ベーム＝バヴェルク、ヴィーザーと続くオーストリア学派が形成され、シュモラーとの方法論争を通じて、主観主義の立場を明確にしていく。これらの思想家たちをきら星のごとく輩出した世紀末ウィーンが場の理論設立の第一期と重なる。場の理論設立の第一期とは、物理学の場の理論に典型にみられる認識論を準備した時期である。

より一層興味深いのは、主観主義革命とでも言うべきこの傾向が、ハプスブルグ帝国の崩壊とともに、思想の担い手達とともに移動して、20世紀にわたり脈々と存在し続けたことである。場という概念を用いる理論や研究は、その後いくつかであるが、そのオリジンを辿ると世紀末ウィーンに何らかの形でたどり着くことが多いのである。

場の理論の発展の第二期は、1914年第一次大戦後オーストリア帝国が解体し、1933年ナチが政権を執るまでの時期であり、世紀末ウィーンで学んだ学徒たち、或いはその弟子たちがウィーン、或いはヨーロッパの各都市で、新しい方法基準に基づきつつ、さらに新しい研究を展開していった。この時期の特徴は、一つは、現象学や存在論、また、論理実証主義のような新しい哲学が設立されて場の認識論的な位置づけについての哲学的な基礎に対する考察が進んだことである。また一つは、ゲシュタルト心理学を初めとして、新しい物理学の方法基準の、社会科学への応用が試みられたことである。マッハとヴィトゲンシュタインに影響を受けたシュリック、カルナップが主催し論理実証主義を提唱したヴィーン学団にはゲーデルなど20世紀の思想に非常に重要な役割を果たした論理学者が集合した。カール・メンガーの息子で数学者であるカール・メンガー・ジュニアもそ

「場についての試論」

のメンバーだったし、後にフォン・ノイマンと組んでゲーム理論の基礎を創ったモルゲンシュテルンもその後期の活動に活発に参加していた。フッサールに破門されることになったハイデガーはフライブルグで存在論的現象学を探求した。また、フッサールの弟子ではなかったが、晩年密接な交友を結び後継者と認められたシュッツは、ウィーンで、フッサールの立場を忠実に守りつつもそれを社会学に応用すべく研究を続けた。シュッツは、戦争終了後のウィーン大学に入学し、そこで、フォン・ミーゼス、ハンス・ケルゼン、フリードリヒ・フォン・ヴィーゼらのもとで社会科学を学んでいる。²⁾フォン・ミーゼスの弟子達が、ミーゼスセミナーに集う。ハイエクはその中心で、マハループ、モルゲンシュテルンなどもそのメンバーであった。また、カールとマイケルのポランニー兄弟はハンガリー出身であった。カールは、メンガーの晩年の思想から影響を受けたという。1924年から1933年まで雑誌Der Österreichische Volkswirtの編集に携わっていたという。³⁾

また、イギリスでは、後期のヴァイトゲンシュタイン、ポパーらの哲学、また、フォン・ミーゼスの弟子であったハイエク、シュンペーターら、アングロサクソン流の経験論と親和性のある理論を展開したオーストリアンが活躍しはじめる。ベルリンでは、ブレンターノの影響下にゲシュタルト心理学が、ヴェルトハイマー、コフカ、ケーラーらによって開花した。彼らの師であったカール・シュトゥンプはブレンターノの門下生であったが、フッサールの兄弟子にあたり、ハレ大学での先任教授でもあり、両者は互いに深く尊敬しあっていたという。⁴⁾フッサールは『論理学研究』をシュトゥンプに献じている。またコフカは、フッサールの講義を聴講しており、フッサールの影響下に自分の心理学の指導理念を確立を確立したと声明している。⁵⁾

第三期は、第二期と重なるが、戦中、戦後の事情により展開される場所

がアメリカに移った点が特徴である。

オーストリア経済学の最後の世代であるフォン・ミーゼスは、1940年に合衆国に移住している。1945年からニューヨーク大学で教えた。1950年には、弟子であるハイエクもLSEからシカゴに移っている。シュンペーターも移る。ミーゼスセミナーの若者達も海を渡った。マハループ(1902-1983)はロックフェラー財団の奨学金を受け1933年渡米し、1933年のバッファロー大学を皮切りに、ジョン・ホプキンス大学、プリンストン大学を経てニューヨーク大学で教えた。この時期のオーストリア人は、ますます哲学的な問題に取り組むようになる。ハイエクの『感覚秩序』以降続く一連の著作、マハループの『知識』、ピーター・ドラッカーの『知識社会』が書かれたのもこの時期である。

また、ゲーム理論の創始者であるモルゲンシュテルンも、マハループと同じく1902年生まれで、1925年にウィーンで博士号を取った後、やはりロックフェラー財団の奨学金を得て、ヨーロッパとアメリカ各地を旅行している。1929年以降ウィーン大学で教鞭をとる一方、1930年代には、ウィーン団のメンバーとして活動していたと言われる。1938年、アメリカ休暇中にナチスによるオーストリア占領の結果ウィーン大学を解雇され、その後、ノイマンとの共同研究のためにプリンストン大学に退官までとどまった。

さらに、クルト・レヴィンはベルリンから、フェスティンガーはウィーンからアメリカに移住し、グループダイナミクス、アクションリサーチ研究を始めたし、また、シュッツも1938年ウィーンを脱出し、一年間パリに滞在した後、1939年ニューヨークに渡り、1943年からNew School for Social Researchの大学院で哲学、社会学を教えた。

第四世代は、第三世代までの思想に直接・間接にふれた若い研究者達の世代である。

「場についての試論」

フッサールの現象学の立場を守りながら、間主観性の問題に取り組んだシュッツの弟子にはバーガー・ルックマンらがいる。ゴッフマン、ガーフィンケルなどとともに現象学的基盤を持ちながら、現象自体を重要視する。この世代の課題は、徹底的に主観主義を押し通す際に、他者や、制度、文化などをいかに捉えるのかという問題にある。主観主義で説明しつくせるところまでした後、どうするかという問題に直面している。英国のギデンズが理解社会学において、また知識社会学のブルデューや、新制度学派デューク・ソーク・パウエルの organizational field, など、新世代の社会学者たちが、場についての論考を展開している。さらに、実証主義の行き過ぎへの反動から出現したとみられている新しい地理学と呼ばれる分野でも“場所”という概念が用いられるようになっている。

また、経済学の領域では、ラディカル・サブジェクティズムを提唱するラハマンを筆頭とし、ネオ＝オーストリアンの台頭がある。

20世紀の社会科学の歴史は、その方法基準の採用をめぐる方法論的な揺らぎのプロセスとして振り返ることも可能である。興味深いのは、新しい物理学主義の強い影響下にあった（例えば構造主義のような）アプローチと、逆に遠く離れた立場を取ろうとする（理解社会学のような）アプローチが、双方、場という概念を用い得るという点である。なぜそんなことが起こるのであろうか？ それを理解するためには、場がどのような認識論上のステイタスを占めているのかを正しく理解する必要がある。その問題をおそらくもっとも突き詰めて考えたのが世紀末ウィーン思想家たちであった。

2 場の論点^{トピカ}

「場の理論は方法としておそらくもっともよく特徴づけることができ

る。」

こう述べたのは、クルト・レヴィン⁶⁾である。彼は、ベルリンにおいてはヴェルトハイマー、ケーラー、コフカらの同僚とともにゲシュタルト心理学の成立に携わり、1933年にアメリカに渡ってからは、グループダイナミクスを精力的に推進した。ゲシュタルト心理学そしてグループダイナミクスという場の理論と関わりの深い研究分野の設立に携わり、その活動を通して、その生涯を、社会科学における「場の理論」の確立に捧げた。1943年に発表された“Defining the Field at a given time”と題された論文のなかで「私自身のように多年場の理論に好意をよせていた心理学者も、場の理論の本質を明確ならしめる場合には、うまくいかなかった。」と告白し、また特に物理学を念頭においた自然科学における法則の一般化の手続きによっては、決して場の「理論」なるものには到達しないと述べている。

クルト・レヴィンは、ゲシュタルト心理学とグループダイナミクスという、場の理論に関わりの深い分野の設立に関わった人物として興味深いばかりではなく、場の理論を通して、20世紀の科学の方法論をめぐる思想史を振り返る時に、ちょうど、世代の交差点に位置づけられるという点でも注目に値する人物なのである。その彼は二重の意味での不幸を背負っていた。第一の不幸は、第一の世代の革命を現象学的な意味で理解し得なかったこと、第二の不幸は、その革命の方法論的基盤を理解することなく、実証主義の道を邁進したこと、しかもそれを学問の制度化が急速に進んだアメリカでやってしまったことである。彼自身は、自分の中で、概念と実証を類希なる才でもって結合できたが、弟子達にはそれは必ずしも伝わらなかった。

クルト・レヴィンの不幸は、現在の我々をもしばしば襲うものである。場についての認識論的な考を突き詰めていくと、結局、場は、我々の認識の内にあるものなのか、或いは、物理的実体として実在するものなのかと

「場についての試論」

いう疑問に行き当たる。場をめぐっては、究極的には2つの立場があるのである。まず第一は、力の場、電磁力の場のように物理量で測定された実体的な範囲、として捉える立場である。これには、人間と人間が物理的に接触を行う空間である、とする捉え方も含まれる。そして、第二は、認識の中に、意志内容が立ち現れるところの意識の場として捉える立場である。人間と人間とが認識上相互作用を行う場所なのだという見方がこれに含まれる。（この中にもさらに、個人の認識の場とする立場と、間主観的な相互作用が行われる現場とする立場という相違があり得る）

極めて客観的に測定され表現された物理的な範囲と、極めて主観的な認識の作用、という全く異なった認識枠組みで捉えられた現象がなぜともに「場」として理解されうるのか。この問いについては、前世紀末の方法論をめぐる歴史をひもといてみることによって、幾ばくかの答えを見つけることができるであろう。主観主義の立場ではフッサールが説明したように、認識とは、外界を意識野にそのまま映し出すようなカメラ箱ではなく、ある特定の現象に向かう（zu den Sachen）志向性をもった意識作用によって可能になっている。このように認識が、主体の志向性によって成立している状況が「場」と呼ばれ得る。しかし一方、実証主義的場、すなわち極めて客観的に測定され表現された物理的な範囲というものであるとしても、その範囲にある種のパターンを見つけてそれが場として記述し得るという科学者の直感、先験に裏付けられた精神の働きがなければそれを見いだすことは不可能であろう。「場」とは、現象にある形を与えようとする精神の働きなのである。その意味では、物理的な「場」も認識的な「場」も同様な認識論的なレベルにおかれる。

このように、主観を客観に取り込むこと、何の基準に照らして事象の真偽を問うのかを明確にすること、即ちある事物の存在を究極的に保証する論理を構築することは不可能であるが、客観を主観に取り込んだ形の説明

をすることはできるというのが超越論的主観主義の立場にたった時の、「発見」であった。

先に述べた物理的な場の理論の成立過程をめぐる、世紀末ウィーン的第一世代が格闘した問題はこの主-客問題であった。主客問題をクリアーしたことが、新しい科学の方法基準構築の第一歩となった。フッサールの現象学と論理実証主義とは非常に異なった問題意識とスタンスから組み立てられているようでありながら、認識論的な形式では非常に近似した形を取っている。そして後に述べるように、構造主義や、シナジェティクスなどの研究は、認識論的な意味での方法論という観点からは、新しい物理学主義とでもいうべきに立脚しているという見方ができる。

しかし、ここで「場」の問題が終わったわけではない。

第二世代以降の世代が取り組み始めたのは、主-客問題を乗り越えた後の問題、つまり、主観主義で世界を捉える現象学的な立場にたった場合の、間主観性の問題である。これは、哲学-現象学の領域では、ハイデガーやシュッツ、そして後にサルトルやメルロ＝ポンティらの実存主義によって、また、社会学、文化人類学においてはポスト構造主義の諸思想によって取り上げられた問題である。フッサールのいう超越論的主観主義現象学の立場に立ってみると、自分の認識の場については揺るぎない説明が可能になるのであるが、客観はあり得ないとすれば、他者の主観をいかに捉えればいいのかという疑問がわき起こってくる。実際、フッサール自身も間主観性についての考察をめぐらせている。社会は相互に何の関連もない主観が寄り集まっているだけなのか。歴史や文化が主観を決定するのか。社会はバラバラな個の集合体にしかすぎないという見方と、逆に歴史や文化や無意識などによって集団として規定された特別な存在であるとする見方、それら双方の立場を取らないとするならば、二人の間で、リアリティーが成立し得る、共同主観が成立しえる状況を、超越論的主観主義の現象

「場についての試論」

学の立場でいかに説明ができるのか、という問題がわき起こるのである。

日本語という言葉に即した、より日常的な言語生活においては、「場」という概念は、むしろ、複数の主体の複雑に絡み合った相互作用を伴う現場でいかに、複数の主観がお互いに成立するのか、という事態と関連が深い。このような現象と、個人の認識に成立する場という見方とはどのように連結することができるのであろうか。

近年、場という概念についての関心が高まりつつある。しかし、「場」の定義となると様々であり、「場」は、極めて多面的であるようにも思える。本論の目的は、第一に、場の多面性がどのような場の認識論的な方法上の特徴に由来するものかを明らかにすることである。後につづく第II部では、思想史的に問題を整理することによって方法論としての場の特徴を明らかにすることによって、なぜ、しばしば、正反対とも取れる立場で場が語られ得るのかを考察する。第二の目的は、方法論的な特徴を踏まえた上で、場の定義を敢えて試みることである。第III部がこの作業に当てられる。

II 方法としての場

1 物理学における「場」の発見

(1) ニュートン物理学の限界

19世紀は技術に牽引された科学の世紀であった。そして、この科学の座の中心には物理学が置かれていた。その背景には18世紀以降の産業革命が押し進めた技術主義があった。熱力学的法則を応用することによって可能になった産業革命は従来からの技術を根本的に変えたが、また技術革新も物理学に対して新しい経験的事実を次々と提供することにもなり、物

理学は19世紀の半ばまでに飛躍的に発展を遂げたのである。そして他の学問分野にも物理学の領域における方法が適用されるようになる。例えば人間の心理に対する現象を、物理現象として捉えようとする実験心理学がおこる。その創設者であるヴントはヘルムホルツの弟子であり、科学的＝物理学的な心理学の樹立の可能性を信じていた。

ニュートン物理学の力学主義をささえていた方法基準は、次のようなものであった。

- ① 現象は、認識主体とは独立に存在する。
- ② 現象を支配している真理や法則をそれ自体無条件な公理として定式化できる。
- ③ 公理が対象としている時空は、我々の存在する現象世界と一致している。

ユークリッド幾何学の公理系に還元できる法則が、認識主体とは独立に存在し、しかも公理の対象とする時空が、現象世界と一致する。このために、諸法則が、相互にお互いを証明しあう公理の体系として表現でき、非常に単純化された公理に還元することができる。この法則の公理性が物理学を科学の中心に据えた。また、法則と現象との一致があるため、法則に従って予測をしたり、法則をある要因を取り出して加工することができる。この現実への適応可能性が物理学と産業主義、そして帝国主義との親和を可能にした。しかし、19世紀中葉の物理学主義をそのまま押し進めていくことの困難は、様々な領域でまもなく経験されることとなる。世紀末に向けてのスチュワード・ヒューズのいうところの「実証主義への反逆」は、何よりも急速に進んだ物理学主義への反動として起こったのである。

物理学における場の理論は、19世紀中葉までの古典的な物理学主義に対する方法論をめぐる「反逆」の意味を持っていた。そもそも、科学至上主義、実証主義という近代の方法論の革命が、物理学から派生したものだ

「場についての試論」

けに、その強力な牽引車であった物理学における内在的批判は非常に大きな影響力を持つことになったのである。ゆえに、他の諸領域に対しても、かつて力学主義が、科学至上主義、実証主義が影響を与えたのと同じくらいに方法論的に、大きな影響を持つようになる。ただし、「場」の理論は物理学の領域内で完結した訳ではなく、同時進行していた非ユークリッド幾何学、統計力学、認識論、形式論理学など諸領域での発見を吸収しつつ、それらの領域を巻き込んで発展し、結果として科学的方法論を根本から再構築することになった。

力学主義の方法一形而上学的な幾何学的法則と、現実の世界における力学的現象とを結合させる方法一を最も厳密な意味で堅固に確立したはずの物理学での方法論の転換は、現実界での主体の行為や研究者の知的作業とは独立に存在する決定的法則の支配への信念に基づいて構築されてきた方法論の礎石に重い楔を打ち込んでしまったのである。

(2) ファラデーの簡便法

しかし、この「反逆」は、実験現場のちょっとした工夫からはじまったのである。

現代物理学における「場」の理論は、実験家ファラデーが、電磁線を等高線のように書き表す手法を考案したことに由来するといわれる。物体と物体との間に働く力を力学的に取り扱うことを基本にするニュートン力学で、熱力学的現象を取り扱うのは非常にやっかいであった。熱力学的現象を説明するために必要な個体のレベルが極めて微視的であり、かつ相互作用が極めて複雑になった。一方で、新しい発見があいつぐ。実験の蓄積がすすみモデルが精緻化されればされるほど、個体間の力学によって現象を説明しようとするアプローチは手法上の困難に直面するようになった。簡便法としてのファラデーの場の考え方は、個体間のレベルでの力学的相互

作用の精密なメカニズムはどうなっているかはさておいて、そのような力学的相互作用の結果、どのような現象が起こっているのかを取り合えず記述してみる、現象の記述法としての位置づけをもっていた。

電磁波のような現象は、個体間の力学的現象として捉えるにはその相互作用があまりに複雑であること、さらに、時間的に常に変化する現象を一つの論理で捉えられないという特徴がある。そこで、固体間に働く諸力の合成の結果として、力を定義するのではなく、空間に働く力を情報圧縮して、パターンあるいは構造として取り扱う必要があった。場として現象を捉えるために情報圧縮を行うことの貢献は、多様な現象を、一つの原理によってみられるようになったことである。場の理論があると、電気の誘導や、光の屈折のように、一見しては何の関係もないような現象を、同じ理論のもとにおくことができる⁷⁾。

しかし、実践家としてのファラデーが実験をすすめるために採用したこの「とりあえず」の簡便法が、古典的な物理学主義の方法に対する「反逆」となったのである。それは、記述された現象としての「場」の認識論的な意味での位置づけに対する問いを喚起し、それをめぐる論争が科学の方法基準を大きく変えることになった。すべての物理現象は力学的法則で記述できるとするヘルムホルツの非常に強力な力学志向に対して、物理現象ですらその観察主体の認識から独立でなく、エネルギーが相互に転換し合う物理現象の記述方法は多様であり得ると主張する「現象学的物理学」が勢力を持ちはじめるのである。

といっても方法論争を展開したのはファラデーではない。彼は、方法論争を展開するよりは実験室にこもっている方を好んだだろうし、そんな彼が科学の方法を意図せずして変革し得たのはヴィクトリアン・プラグマティズムの恩恵なのかもしれない。

(3) マッハの認識論

アインシュタインが、時期が熟していれば相対性理論に真っ先に到達したのは間違いなくマッハであっただろうと述懐しているように、相対性理論の認識論的なバックボーンとなる方法を追求したのはマッハであった。そしてそれが同時に新しい科学の方法基準となった。

マッハが問題としたのは、記述された現象としての「場」の認識論上のステイタスである。マッハは、ゲシュタルト心理学にそのまま継承されうる認知メカニズムに関する仕事を通して、認識と認識の対象との相互依存関係についての言及を執拗に行う。現象としての「場」はいかなる意味で、存在するといえるのか。場がそれを構成する要素の単なる集合であるとすれば、場は完全にリダンダントな概念であり、力学の原子論的な世界観となら矛盾することはない。しかし、認識論的には問題が存在するのである。

数学的には、場の定義は、非常に簡潔な以下のようなものである。

「物質または空間の一つの領域において、ある状態量が各点の関数として与えられる時、その領域を状態量の場という。」そのような定式化と、定式化に従って記述された場をみるかぎり非常にシンプルである。が、どのような変数に「ある状態量」を定めるのかを決定するまでの手続きを考えれば、問題はそれほど簡単ではない。

まず、ある状態量が各点の関数として与えられる領域として場を表現することには、観察者問題が、つきまとう。状態量は、観察者の立つ位置に影響を受けたり、或いは観察者の主観によって変化するからである。しかし、むしろ、観察者問題があるからこそ、場として記述することに意味があるのである。宇宙の内においてある地球上の存在としては、力学的足場を造ることができない。宇宙外にでることは不可能であるので、観察者がどこに存在しようと、足場は得られない。自分も含めた世界を記述しなけ

ればならない。

アインシュタインの相対性理論は、誰の視点にも左右されない絶対空間の否定であり、剛体としての光を尺度に表現するというものであった。どのような観察も、観察者と独立に存在できず、あらゆる現象は観察者との関係をそれ自体に含んでいるというのが、場の理論の立場である。場は、観察者と観察とがセットになった概念であって、その観察者の立場を与えなければ記述できない現象に、いかなる意味で法則性や普遍性を与えられるのか、認識論レベルでの場の理論の中心的課題である。

さらに、情報圧縮の問題がある。

「ある状態量」とは、情報圧縮の結果であって、「ある状態量」で示された場がシンプルだからといって、現象がシンプルだということにはならない。非常に複雑な個々の因果関係からできている現象をミクロな観点にたって説明することがあまりに困難なので、微視的世界の観察を諦めて、領域として少し視点を引いて捉えようとした結果だからである。場は優れて情報圧縮的なのである。情報圧縮は観察者の意味作用のなせる技であり、その意味でも世界は、観察と独立に存在するわけではない。

しかし、それだけであれば、力の作用を細かく定義し、膨大な量の相互作用の束として捉えることで、従来の力学的方法でも原則的には接近可能であり、“根幹を揺るがすほどの”出来事ではなかったかもしれない。情報圧縮の問題は、いかなる手続きをもって、情報圧縮するのか、その方法によって、情報の内容が変わってしまうことにより、深刻な問題となる。「ある状態量が各点の関数として与えられる領域」というステイメントに言及されているように、場とは領域である。従って、その領域の設定の仕方に直接的に影響を受ける。境界設定の問題は、場の概念にとって本質的な問題である。場について言われる「容器性」「境界性」などは、境界設定問題と直接的に関連している。例えば、ネットワーク論では、個と個

「場についての試論」

の連結の全体に注目するため、ノードのようにどこまでも繋がってってしまう。場では、境界設定のメカニズムがクリティカルに重要なのであるが、それは、誰がどのように境界設定を行うのかに依存し、その認識作用を問う必要がある。

このような問題は、ニュートン力学を基礎に据える物理学の方法基準に真っ向から対立する。マッハの主張した現象学的物理学は、古典力学的の世界観を拒絶するものだったのである。それ故に、新しい世界観のもとで、新しい方法基準が必要とされるようになった。新しい世界観とは、すなわち、

- ① 自然は、認識主体とは独立に存在せず、自然現象は認識主体の観察に依存する。
- ② 自然を支配している真理や法則は、それ自体無条件な公理として定式化することができず、仮説にしかすぎない。
- ③ 公理が対象としている時空と、我々の存在する現象世界とは、無条件に一致するわけではない。

このように古典的力学の世界観が拒絶された場合に、何を持って“科学”と言えるのかが、方法論上の大きな課題となったのである。これを支えたのが、物理学とともに発展したともいえる統計力学とトポロジーであった。

(4) マクスウェルによる統計力学的解決

ファラデーによってプラクティカルな便宜性のために考案された場の方法に統計力学を結びつけることによって新しい方法基準を打ち立てることになったのは、マクスウェルである。

「ある状態量が各点の関数として与えられる領域」として表現される場は、観察者の視点を含んだ一つの「現象」であり、場として捉えるという

ことは、現象を一つの全体として捉えることである。つまり、場として表現されたデータ群は、単一事例なのである。一つの事例にしかすぎないデータ群を分析し、あるパターンを導いた上で、そのケースとパターンとがどのくらい乖離しているかを検証する、という統計的手続きが、統計力学によって整えられるようになった。『構造主義』においてピアジェは次のように述べている。

「古典的な物理学では、物理学の理論は、そのまま直接に実在に合致するもの、あるいは実在を正確に反映するものだという前提に依拠して構築されてきた。しかし、量子力学の世界では、理論が表現しているものと、我々が経験的に捉えられる現象世界との間には確率が存在する。⁸⁾」

ここでのパターンとは、あくまでもシングルケースとしてのデータ群にみられるパターンであって、ニュートンの意味での“普遍的法則”とは全く異なる地位を持つことは明らかである。統計的一般化という新しい基準に基づいた法則であって、それは仮に法則という名称を使うとしても、ある条件下におかれたデータセットについて成立する“ローカルな法則”であって、ローカルな法則をいくら純化していても、決して、ニュートン力学の意味における公理、即ち、観察や分析とは独立に、現象を支配している真理や法則を支配している法則という地位に到達することはできないのである。

マクスウェルの方程式は、場の構造（強調点 原点）を示す方法である。「マクスウェルの理論には物質的な演技者は何もありません。……ニュートンの法則におけるように、二つの遠方に離れた出来事を結びつけるのではありません。ここでの出来事をあそこでの状態と結びつけるのではないのです。ここでの、そして現在の場合は、ごく近所での、そしてすぐ以前の場⁹⁾に関するのです。」

現象とは独立に存在する公理系への帰属によって法則の地位を獲得する

ことができない場合，“ローカルな法則”はどのような地位を持ち得るのだろうか？

ここで問題になるのが、法則間の因果関係である。ニュートン力学では、あらゆる法則は公理体系から導くことができ、法則どうしが矛盾を犯さないように公理体系が構築されていた。しかし，“ローカルな法則”をたくさん積み上げていっても、それを決して公理の地位にまで高めることができないとすれば、完璧な論理整合性の保証された公理系の無矛盾性への帰属によって、ローカルな法則の間の因果関係を保証するという形での法則体系の構築は困難に陥ってしまう。

(5) 新しい数学

「もともと物理学は外見上何の結びつきもない、非常に多数の経験法則を含む、記述的なマクロ物理学として出発した。」¹⁰⁾ マクルーハンの言葉を借りるなら、場の方法とは、様々な問題に対する「モザイク的なアプローチ」なのである。

外見上何の結びつきもない“ローカルな法則”を連結するのに役にたったのが、トポロジー、すなわち位相変換の考え方であった。リーマンやヒルベルトによる非ユークリッド幾何学の登場により、ユークリッド幾何学における公理系の超然とした絶対性は崩れてしまった。我々の存在している時空間と一致しない公理体系をいくつも同時に組み立てることができること、しかも、異なる公理が互いに矛盾しない公理系の無矛盾性を保証することができること、が証明されたのである。

ニュートン力学を支えていたユークリッド幾何学においては、公理系の絶対性を支えていたのは、究極には、現実の現象としての空間の堅固さであったが、トポロジーの発達によって、幾何学の対象は、経験的・現象的な空間とは切り離されたものとなった。点・線・面などの幾何学の基礎概

念であっても、いくつかの公理の組によって、それらの公理をみたすものとして、間接的にしか定義されえない。我々は、「空間」を新しい認識論的な枠組みで捉えるようになったのである。

ここにおいて「場」の概念も大きな一步を踏み出すことになる。つまり、ファラデーによって便宜的に考案された場の概念では、電磁場や、力の場という実体の場として把握されていた。新しい空間表現を獲得し、新しい位相空間が成立するその成立の仕方の中に「存在」するようになったのである。新しい数学は、マッハの現象学的物理学の「現象」という考え方の数学的な表現形を提供することになった。

2 新しい物理学主義の影響：構造主義とシナジェティクス

(1) 構造主義

「場」の概念の確立のためには、主観一客観をめぐる新しい認識枠組みが必要とされ、科学における新しい方法基準が構築される必要があった。そして、ここで構築された「場」の方法は、新しい物理学主義とでもいべき特徴を持っていた。力学主義から、場の理論に結集される現象主義への、物理学における方法論的大転換は、社会科学の研究領域にも大きな影響を及ぼさざるを得なかった。20世紀をむかえるにあたって、知の方法は根本から変わってしまったのである。物理学における場の理論は、認識論レベルの方法論という見地から影響を与えた訳ではなく、ミクロとマクロの関係を含む研究対象という点でも大きな影響を与えている。さらにまた、それに伴って発展した手法、即ち、統計学と、位相幾何学が他の分野でも採り入れられていくことになる。

その一つの典型が、ゲシュタルト心理学から出発し、グループダイナミクス研究に発展させたクルト＝レヴィンであろう。彼は1940年代に次々

と発表した論文で場やトポロジーなど物理学で用いられるようになった概念を直接に応用し、社会科学における場の理論の構築を目指した。このレヴィンの方法的な構えは、構造主義のそれと軌を一にしていた。方法的な意味で物理学の“革命”を捉えるなら、構造主義こそ、物理学で確立された新しい方法基準をいかに社会科学の分野に解釈しなすかという試みの典型だったといえることができるだろう。

構造主義は、新しい物理学の方法論を社会現象に適用しようとする方法論革命であった。ピアジェは、古典的な〈〈原理の物理学〉〉以降の物理学では、法則の因果的説明の中で用いられる論理数学的構造と、現実について仮定された構造とのあいだの関係が問題であり、これは、構造主義に対して提起される主要問題であると指摘している¹¹⁾。ピアジェは、構造主義の特徴は、①全体の事態からの分析②場の関数としての行動③構成的方法④数学的表現に代表されると言う。そのように捉えられた場合、場の理論は、構造主義の一部となる。実際、ピアジェは「方法的構造主義の希望、その部分的実現」がもっとも理想的な形でみられるのは、Kurt Lewinの場の理論であると指摘している^{12) 13)}。

しかし、レヴィンは、そこまで厳密に論理数学的構造と、実体としての場の現象との独立性を明確に意識していた訳ではなさそうである。レヴィンは、論理数学的構造としての場と、実体としての場とのステイタスをししばしば取り違えているが、それは、観察・分析する主体の認識と、観察される主体の認識との混同に起因し、結局、それは、観察される主体の認識を、“客観的に”測定することができるという彼の実証主義への信念によるものであった。実際、アメリカにわたってからレヴィンは、“オーストリア派の”同僚とは、客観主義をめぐる衝突していたという。主観主義革命の後、物理学の場の理論にたどり着いた“オーストリア派”にとっては、それは終わってしまった論争だったはずである。

その意味で、新しい物理学の方法基準を正しく理解して、社会現象への適応にもそれを徹底して実行したのはレヴィ＝ストロースであった。レヴィ＝ストロースは、現象としての場（構造）と、主観が捉えた場（構造）とを峻別した。構造は再構成された論理の変換群であって、確認される事実に属しないと考へ、考察の対象となる集団の構成員には“意識されないもの”であるとした。認識的に、あくまでも、観察・分析者の主観の上には存在しないものであると、主観主義を徹底したのである。

構造主義は、個の体験でも社会的現象でもなく、再構成された論理の恒久的な安定性に構造を見出していることになる。論理が一定の手続きによって組み立てられており、その内的整合性が高ければ高いほど、構造は静的で共時的な性質を持つこととなる。取り出される構造は、人間がもともと持っている生得性でもなく、「体験されたもの」ですらある必要もない。知性に対する社会的なものの優位性を唱えたデュルケームとは一線を画し、レヴィ＝ストロースは、そこにむしろ、知性、或いは恒久不変の人間精神をみた。

物理学主義を忠実に模倣する場合、第一に、行為者と、観察者との間の認識とが分断されること、第二に、構造自体は、変換群から構成されていても、行為の主体者はその変換則に基づいて行動しているわけではなく、主体の自由意志に基づく行為による構造の変動の可能性は排除されていることが必要なのである。

このことから派生する問題として、場の境界設定の恣意性の問題がある。バウンダリーを設定するメカニズムが論理の内に組み込めないからである。場を構成する主体はバウンダリーを設定することができないので、どの主体をどのような基準で選び出し、どの主体のどのような行為を取り上げるのかは分析者しだいということになる。その際、分析者がどのような基準を用いて境界設定を行うべきかについてルールを定めることができない。¹⁴⁾

理論の中の行為主体の認識は考えず、分析者の認識のみがクローズアップされるのであるから、分析者の認識においてしか境界は設定できないのである。

レヴィ=ストロースは自らの論理構造を十二分に理解していたが、レヴィンは観察者にとって観察された場と、行為者達にとっても同じように認識された“実体のある”場だと考えた。そしてそのことによって、厳密さを欠くことになってしまったのである。

(2) シナジェティクス

場の近接領域のもう一つの雄は、ハーケンのシナジェティクスに代表され、カオス論、最近の複雑系の議論につながる自己組織性の議論である。この議論はランダムな個の行動と、全体的なパターンの生成の関連を問題にする。この場合、場は、個と個が相互作用を行うにあたっての拘束条件として作用するものとして捉えられる。物理学の場の理論を支えた新しい数学のツールである幾何学と確率論のうち、幾何学的思考法を追求したのが構造主義だとすれば、自己組織性の理論においては確率論モデルの社会現象への応用の方向を拡張していったものであると考えることができよう。自己組織性という概念自体の歴史はオートポイエーシスなど古いが、昨今のリバイバル的な取り上げられ方の背景には、確率論モデルに基づくシミュレーション手法が、コンピュータの能力の増大とともに飛躍的に表現力を増大したことがある。

ハーケンのシナジェティクスがそもそも熱力学現象についての研究に関して展開された議論であったことにも明らかなように、自己組織性の議論は、物理学における原子モデルを背景に組み立てられている。

社会モデルに関しては巨視的構造が、物理現象においては微視的構造がみえない。ミクロ・マクロ問題を、自己組織性のモデルに即して解こうと

すると、結果としてのマクロ現象は確定された決定論モデルになってしまふ。システムを構成する主体は外生的に与えられた“場”との関係で自らの行動を決定する。ここで拘束条件として与えられた場の関数はその情報を読みとろうとする行為者の認識に依存しない。1970年代にハーケンやブリコゾーヌらの自己組織系の研究が相次いで登場することで、個々の主体の行為の自由度を前提にした協同現象が注目されるようになり、現在の複雑系の問題、方法が提示された。しかし、論理構造は、構造主義と同様の認識モデルに依拠している。

(3) 論理実証主義における認識

構造主義と自己組織性研究は、方法基準において、また手法において、新しい物理学、場の理論の方法から大きく影響を受けていることを確認してきた。その特徴は、場の認識論上のステイタスを、観察者の主観によって捉えられたものとして捉え、現象と切り離す点にある。そしてこれは、論理実証主義の認識モデルと合致していた。

対象となる現象を構成している行為者の意識や認識は敢えて無視されており、現象の境界も観察・分析者の分析の中にのみあるものとして捉えられた。それは現象を事物として捉えようとする行動主義の態度と通底していた。また、自己組織性の議論でも、境界をみずから作り出す、ということが盛んに強調されるけれども、あくまでも実験室的に外部から拘束条件を与えているにすぎない¹⁵⁾。このような認識論的枠組みで捉えられる「場」とは、観察者の主観において捉えられた現象のパターンであるか、或いはそのパターンを決定している（と観察者によって捉えられる）拘束条件である、ということになる。

論理実証主義では、思考の論理（メタレベル）と、思考の対象（オブジェクトレベル）とが厳密に峻別されている。ある現象を、観察し、その観

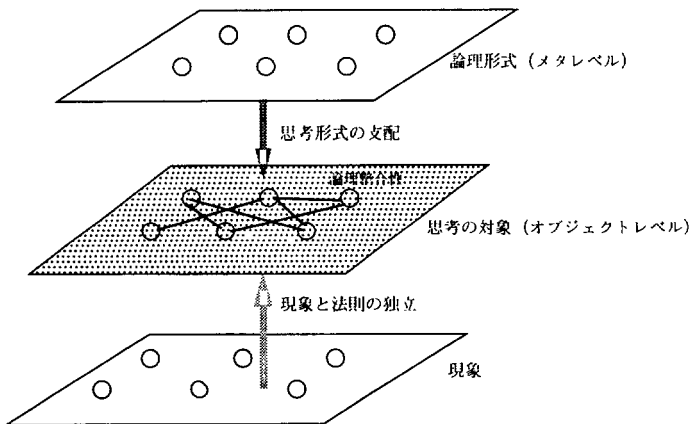
「場についての試論」

察に妥当な概念をあてはめ、思考の対象として取り扱う。思考するという
ことは、このオブジェクトレベルでの内的な整合性を整える論理を対象に
与えていくということである。論理形式に支えられることによって、思考
対象は、思考の対象になるけれども、論理形式自体を思考対象にするこ
とはできない。これまでみてきたように、ある論理の正しさは、現象を思考
の対象へと対象化するその仕方に客観性があること、そして、オブジェク
トレベルでの内的な論理整合性があるかどうかによって判断される。

(図1)

このような主観の内部的な「場」へと場を閉じこめてしまうことが可能
なのは、観察された現象が、それを説明する論理から独立しているからで
ある。観察者が主観のなせるままに現象をいくら切り刻んでも、ゆがめて
も現象は、堅固に存在したまま傷つくことはない。その堅固さに甘んじて
主観は、整合性基準の許す限りで、思い通りの論理世界を構築することが
できたのである。場の理論が追求したのは、現象と論理の独立性に基づく
方法基準だった。

図1 論理実証主義における認識



場の理論が超克しようとしたのは、神のように超然とした足場から現象を観察し、神を論理（法則）にすぎ替えることによって、自己が神に成り代わろうとするデカルト的世界観だったのである。世界の外に立つ神としての自己の立場を否定することによって、自己は自分の構築した世界内の存在になることができた。けれども、それは自分の作り出した世界への囚われの身になってしまうことを意味した。我々が目を閉じて杖をつき道を歩くとき、杖をつく刺激を通して身体化される世界の中に住み込まなければならぬのと同じように、論理という杖を通してしか世界をみるできないのである。

杖を通して間接的にしか世界に触れることができないのは窮屈そうであるが、しかし自分の中に描き出された世界は、堅固な現実の反映であって、堅固な現実が確実に存在する限り、自分の作り出した世界を手がかりにして、堅固な現実に触れている手応えを感じることができる。その手応えの確かさによって、安定した世界との確固としたつながりを確認することができたのである。つまり、いくら切り刻んだりゆがめて映し出されてもそれとは独立に存在し続ける世界の存在への信念が、手応えの確かさを保証していたことになる。

3 社会科学への挑戦

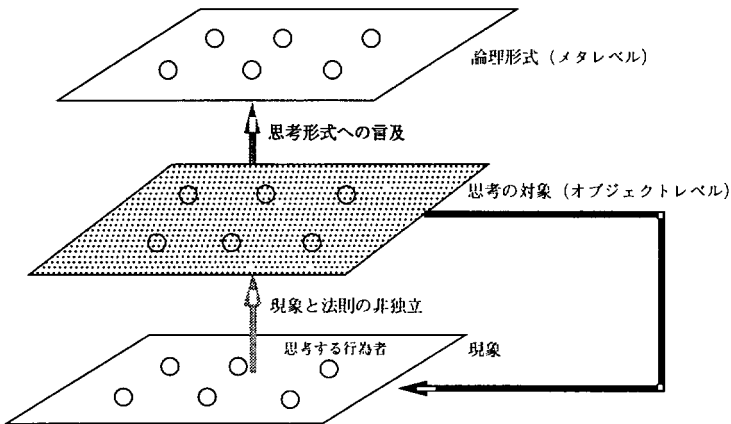
(1) 論理実証主義の限界

しかし、世界が観察者の観察に影響されないで存在しつづけるという想定が成り立たないとしたらどうなるだろうか。観察と現象の独立性が保証されないとしたら？ 社会科学の取り扱う現象では、観察対象である行為者が個別に意識と意図をもって行動する。行為者は、観察者の論理までを読み込んで行動する。その行動によって現象自体が変わってしまう。物理

現象においては、物理現象を支配している論理をいくら取り出してもその論理自身を変えることはない。しかし、複数の行為者が個別の意識と意図をもって行動する社会現象では、論理と現象の独立性が保証されない¹⁶⁾。(図2)

思考の対象を、“認識をもった主体”“自ら思考する主体”とした途端にこの方法の構造は揺らいでしまうのである。オブジェクトレベルにある客体(オブジェクト)に思考させようとする、その思考をモデル化しなければならない。するとその思考はどのような論理形式をとるのかという問いが生まれる。ここに、自己言及問題が発生する。オブジェクト=レベルにあった客体を、自ら思考する主体(サブジェクト)として描き出さなければならないからである。論理実証主義では、観察者、分析者みずからの論理形式についての思考を厳密に禁じてきた。自らの論理形式への言及を巧妙に避けたとしても、思考する主体への言及によって、論理形式への言及が不可避になってしまうのである。

図2 自己言及の発生



(2) 論理実証主義の挑戦

このような問題に対して研究者が取り得る態度は、2つある。

一つは、この問題を回避し、自己言及に陥らないような概念装置を考えようとする態度、今一つは、この問題を逆手にとって利用する方法を考案しようとする態度である。

自己言及問題を回避する最良の手段は、客体である行為者の認識や、思考の思考を無視して、あくまでも客体として取り扱うことである。構造主義が、頑なに、“行為者の意図とは独立の”構造にこだわったのはこのためであったとも考えられる。しかし、いくばくかでも行為者の認識か、思考を取り扱おうと思えば、構造主義の、あるいは論理実証主義枠組みを逸脱しなければならない。また、そうでなければ、変化や多様性が生まれるメカニズムを説明できないのである。

①情報処理パラダイム

それを非常に巧妙に行った試みの一つが、情報処理パラダイムであったと考えられる。情報処理パラダイムでは、客体である行為者は、認識したり、思考したりするけれども、その程度に制限を設けることによって問題を回避することに成功している。サイモンが、注意深く価値と事実を分け、事実だけに注目するという限定を設けたり、人間の合理性の認知限界にこだわったのも、思考の範囲を限定し、自己言及などは行ったりしない思考装置としての人間を想定したからである。

1970年代には、様々な分野で、情報処理パラダイムがもてはやされた。心理学、システム論、経営学・組織論におけるコンティンジェンシー理論や、マーケティングでの、ハワードの消費者行動論などが典型である。情報処理モデルを経て、経済学の分野でも、消費者行動のランカスター、また取引経済学の分野でも、サイモン流の限定合理性と階層性の問題が取り

「場についての試論」

入れられるようになった。情報処理モデルでは場は環境の一形態としてとらえられ、行為に対する拘束条件として働く。

1980年代には、情報処理モデルの限界が議論されるようになる。1930年代に定式化された自己言及問題は、その文脈において、再・言及されるようになった。特に、日本で組織認識についての議論が流行した。「場」についての関心もこの中から生まれたといえる。問題は、自己言及問題を「再・発見」した後の研究への取り組みであろう。

先に検討をおこなった自己組織の見直しは、情報処理パラダイムの超克として表れたと考えてよい。モデルにおける行為者は、限定された範囲内で、認識し、思考し、行動するが、まったくフリーハンドに振る舞いを許されているわけではない。行為と結果の因果は、non-linear に stokastic に決定される。先のシナジェティクスの議論にみられたように、このアプローチにおいても、場は拘束条件として働く。カオス論に依拠した、path dependency¹⁷⁾の議論などがこのアプローチの典型と言える。

②メタ認識パラダイム

場についての研究では、「その場の雰囲気が決まった」とか、「場が議論を収斂させる方向に導いた」、という表現がなされることが多い。これは、場をメタ認識の主体として据えることで、自己言及問題を回避しようとする態度の現れである。

自己言及問題に言及した研究には、既存の研究に対する批判に重点をおき、既存研究の虚構性を指摘することを中心としたものも多い。そこでの立場は警鐘をならすだけ、にとどまるか、知的アナーキズムに近い立場もある¹⁸⁾。しかし、かりに言明が正しいとしても、そこにとどまる限り、自己言及の畏から抜け出すことはできない。そこで、「メタレベル」の何かを仮に想定して、論理を論理たらしめているもの、意味を意味たらしめている

るものを保証するシステムを考えようとする試みが行われた。「メタ認識」だったり、「ゲシュタルト」だったり、「組織文化」だったりした。しかし、そのような外部の項を設けることにより、現象の説明はうまく行く可能性があるけれどもそれが、果たして妥当な概念かどうかは不可知である。それは、自己言及の構造そのものを回避している訳ではなく、自己言及を起こさない主体とは言えない主体（それ自体は漠然として存在し思考をしないから）＝文化や組織に押しつけただけでも言えるからである。「メタ認識」を持つ主体は誰かという問いに対する答えは、「組織」であるという答え方を取らざるを得ない。認識をしない組織がいかに認識をするのかという、メタ・メタレベルの問いが誘発されていく。その意味では、方法論的にはデュルケームの巨視的社会学へと逆もどりしてしまうのである。その場合、場が、メタ認識の主体であるという表現は、論理的に同型の構造を持っているのである。

③ゲーム理論的

さらに、思考する複数の主体どうしに共有される論理、思考のパターンを場の共有と呼ぶこともある。

組織認識という方向での自己言及問題への取り組みは隘路に追い込まれたが、一方で、自己言及問題を逆手に取る議論が注目されるようになった。脱構築（deconstruction）というよりは、再構築である。ブルデューらの新制度派社会学、ブードンなどゲーム理論を用いた社会学では、自己言及の構造をむしろ利用して円環の論理を作ってみせる。ゲーム理論は認識論的には、ミクロレベルとマクロレベルの2つの層から構成されており、行為者は、ミクロ・マクロの連結まで知り尽くした認識主体として行動する。

このような認識論上の2つのレベルからなるモデルの初期的な典型例を

「場についての試論」

ベルトラン、エッジワース、そしてチェンバリンらの、1930年代の経済学者達の不完全競争モデルにみることができる。モデルにおける行為主体は、自分の行為の認識と、行為の結果についての認識レベルを切り替えて、レベルをそのつどジャンプしながら行動する。そこには認識レベルの断絶があり、「不器用な」モデルである。しかしその不器用さがあるからこそ、我々は、行為者の構造を観察するにあたって、モデルに仕組まれた2つの認識レベルを識別することができる。パラドクスや、ジレンマ的状况が好んで扱われるけれども、それは、結果としてのパラドクスであって、モデルにおける行為主体は、あらかじめそのジレンマを知りつつ行動しているわけではない。モデルの構造を全く知らないで行動する結果として、ジレンマ的状况を作り出してしまふ。

初期の不完全競争のモデルがゲーム論として展開されていくと、不器用さはしだいに削られて、認識論的に滑らかなものになっていく。しかし、この滑らかさは、モデルを観察する或いは分析する我々をもゲームのルールに拘束する理論の形式をゲーム論が獲得していったからに相違ない。つまり巧妙に設定されたゲーム的状况は、モデルを構成している行為者にとってゲームのルールであるばかりではなく、そのモデルを考える我々をも縛ることによって、行為者の認識と我々の認識とを同じレベルに縫合しようとする。ゲームの行為者が我々のように考えるように、我々もゲームの行為者のように考えることをゲームのルールによって要請される。このようにルールが行為者とそして観察者である我々に共有された状况がゲームという場である。つまり、場とは、ゲームのルールの共有に他ならない。非常に限定された状況設定をルールとして受け入れるところに場が成立する。ゲームの行為者（そして我々）は、ゲームの構造の全体を我々の行為がどのような結果をもたらすかをも含めて知っている。しかし、他のプレイヤーが取る手については決定できない。他者がとる手のみに行為の結果

が依存し、その他者の行為に自分はなんら影響を与えられないところに、自己言及性が保証されている。

これは、行為者の認識と観察者の認識とが重ね合わせられている点において、行為者の認識を全く考慮にいれない構造主義の態度とは全く異なる方法論的基礎に立っているように思われる。しかし、観察者の認識までもゲームの構造のなかにつなぎ止めたと言う点では、より堅固な構造主義という見方もできる。実際、「非決定的な状況を決定する」という点に関しては、構造主義と似た認識論に立っている。

論理形式がいかに成立したかは全く問わずに、ゲームのルールとして論理形式を受け入れた場合における現象の亀裂を指摘することによって自己言及の存在を示すという理論の型が、論理実証主義的な方法である。ここでの場合は、ルール（論理）の共有という形で表現されることになる。共有された認識場という認識論的なステイタスを与えられている。

4 場所の哲学

(1) 論理の無場所性、意味の場所性：認識は誰のものなのか？

ある言明が真であることを表明するには2つの方法がある。既に証明が済んで真であるとされている言明を用いて証明を行う方法が一つ。言明の帰属する人物がより信用に足りるかどうかで判断する方法が今一つ。前者の場合であれば参照する言明の証明が済んでいるといっても果たしてそれが真かどうかを確かめるにはまた他の真なる言明を参照しなければならない、そして、その言明の真を確認するためにもまたその前の……という循環が、また、後者のばあいなら、言明の帰属する人物の信用性をまた、他の人物の信用性に参照して判断しなければならない……という循環が起り得る。しかし、論理による証明と、他人による保証との間には大きな違

いがある。論理による証明は、論理形式にさえ従っていれば誰が証明を行っても構わないが、人による保証は、信用の帰属する人物が特定されるということである。そのためには信用が誰に帰属するのか、その仕方がわからなければならない。

上のような2つの方法の差は、それぞれ論理実証主義と存在論の認識的構造に対応している。論理実証主義においては、ある言明の真疑を判断するのは論理、論理形式であって、判断に使う材料を持った存在ではない。つまり、論理形式が超然と支配しているため、価値判断を行う認識が誰に所属するのかを全く問わなくてもいいのである。それと对象的に、存在論では、判断を行う認識が何に由縁するのか、誰に帰属するのかを問う必要がある。判断の最終の保証人を行うのが神であるとすれば、神学的な存在論を展開することになる。論理はそれを展開する人（存在）とは無関係に成立するので、存在から超越したステイタスを獲得することができる。論理実証主義が古色蒼然とした存在論ときっぱりと袂をわち、存在論的な問いの構えを一掃してしまえたのは、実は、論理の、この帰属からの独立性、無場所性のためなのである。

しかし、論理形式では証明できない問題、即ち、価値や意味といった問題については、論理は手を出すことはできない。それは必ず、誰にとっての価値か、誰にとっての意味かといった形で、存在への帰属を必要とするからである。前期ヴァイトゲンシュタインの「語り得ないものについて語ってはならない。」という要諦は、価値や意味についての論理実証主義の態度表明とも言えた。¹⁹⁾ 価値や意味からの独立は、普遍性を志向する精神が求めたがるものである。サイモンが情報処理パラダイムにおいて、価値前提を注意深く取り払ったのは同種の精神によるものかもしれない。人種や文化や言語、宗教が複雑に混じりあうヨーロッパの混沌をかるうじてまとめあげていたハプスブルクのウィーンだったからこそ、普遍性に対する憧憬

が深かったのかもしれない。普遍言語としての 에스ペラントや、ヨーロッパ共同体というアイデアが生まれたのもこの時期のハプスブルク帝国から生まれたことも決して偶然ではないだろう。

しかし、意味や価値の問題には、論理形式で立ち向かうことはできない。必ず、何にとつての意味なのか、何にとつての価値なのかという形で、論理の外に、意味や価値を付与するメカニズムを想定しなければならないからである。そして、意味や価値の問題は、他者性について考える際に決定的に重要になるのである。自分だけの意味や価値なら、括弧付きの「私」にとつての意味や価値として、その「私」がどのような存在²⁰⁾なのかを取りあえず詮索せず、棚にあげておいても影響がないからである。しかし、他者とのやりとりでは、「私」にとつての意味や価値が、相手にとつても同じ意味や価値を持つのか否かについては全く保証がない。もし、他者とのやりとりで、意味や価値が成立するのであればそれは、その意味や価値は何において成立するのかを問わなければならない。ここで、論理の内部で論理を説明するという論理実証主義の堅固な姿勢は崩れなければならなかった。

「語り得ぬものについては語ってはならない。」この禁を犯して、世紀末ウィーン思想が注意深く保留しておいた問題、禁じ手とされていた問題、つまり、意味や価値の問題にまともに取り組もう試みが生まれてきた。意味や価値の問題、他者性の問題に取り組もうとしたこの時期の哲学—ハイデガーと西田幾太郎に典型な—が、「場所」あるいは「場所性」を主軸にして構築されたことは興味深い。そして、それが、フッサールの影響を強く受けつつも、ウィーンにとつての辺境—日本とドイツで、ほとんど同時期に生まれているところも（西田幾多郎の「場所」が1926年、ハイデガーの『存在と時間』が1927年。）思想の時代性・場所性について深く考えさせられるところである。それは、当時のウィーンの知的洗練から見れば、

田舎者のいけ図々しさという感じであったかもしれない。しかし、図々しくなければ突破できない壁はある。そして時代は、図々しい田舎者の時代になっていた。

(2) ハイデガー：存在論という野望

意味の問題は複雑である。論理は「誰にとってもその指し示すことが明確である」という前提であるが、意味の問題は「誰にとって何の意味があるのか」という問いを含み、「誰にとって何の意味があると、誰が考えるのか……」という様に、いくらでも重層的な問いを無限に重ねていくことができるからである。

自己言及問題では、思考対象と思考形式の2つのレベルの亀裂が問題になる。ハイデガーは、この2つのレベルの断絶を、思考対象と思考形式の2つのレベルに二重に存在する「現存在 (Dasein)」の運動として捉えることで、架橋しようとした。現存在 (Dasein) は、意味を付与する存在としての人間をあらわす造語である。思考対象としての存在者がオブジェクトレベルで捉えられた存在であるのに対し、その存在者を捉える主体であり、しかも同時に自らオブジェクトレベルに身をおくと同時に思考形式を支配してもいる意味でメタレベルを形成してもいる二重性をもつ。この二重性こそが、ハイデガーの存在の構造なのである。2つのレベルの二重性への注目という限りは、ギリシア哲学の形而上学の問題設定と変わらないが、Dasein の運動として、2つのレベルの接合を試みた点が、斬新な点であった。

メタレベルの現存在を、オブジェクトレベルに送り込んで、存在者とダイナミックに関係づけるのが存在、そして存在了解 (Seinsverständnis) である。「〈存在〉とは現存在によって投射され設定される一つの視点のようなものであり、現存在がみずから設定したその視点に身を置くと、そ

の視界に現われてくるすべてのものが〈存在者〉として見えてくる、という²¹⁾ことである。」

この存在という視点は、単に、ある時点である主体を物理的、あるいは生物学的に取り巻いている環境によって一方的に与えられるものではなく、記憶や予期などの心理的作用を通して、意識的あるいは無意識的に与えられるものである。現象学の主題である意識 (Bewusstsein) を開性 (Erschlossenheit) から説明し、Dasein は自己を出る「脱自性」を持つ概念として説明された。世界は、開かれてある Dasein がその内にあるところの「開け」なのであり、世界内存在である Dasein の存在を構成する一つの根本契機である。つまり、自己の認識が世界を構成するという主体中心の世界観ではなく、また、世界が自己と独立に存在する客観主義の世界観でもなく、存在に照らされた世界に世界内存在として存在する自己という主 = 客の間を揺れ動くメカニズムを考案した。

前期ハイデガーでは、現存在という自己が、存在を決定するという、主体中心主義を取っていたといわれる。一方で、存在という視点の設定が、現存在の自覚に先立つというビジョンももっていた。存在という視点の設定があってはじめて自己がその出来事が生起するところの現存在であることを自覚するという説明である。そのような説明のためには、存在を生起させているものは何かという問いが生まれる。

「自由だけが現存在に対して、ある一つの世界が存在し世界として現れてくることを可能にする」という言葉にみられるように、存在了解や存在という光が当たることによって、現存在の意識や意図を離れた何かによって初めて世界の中に投射される点を強調しているが、誰が、或いはどのようにこの光が当たるのかの説明自体は必ずしも明確であるわけではない。存在了解や存在投射という考え方自体、主体の意図を感じさせる。Dasein に光を当てている主体は、どうしても「自己」ということになる

「場についての試論」

からである。つまり、巧妙に避けたつもりでいて、世界を自分からみるという主体中心的な性格がどうしても残ってしまったのである。

ハイデガーは、自らこの問題を中心的課題として捉え、後期ではこの主体中心的性格の払拭が試みられる。この試みの中心となったのが場所論（Ort 論）であった。「転回」Kehre 以前と以後とは、その立場を大きく変えたハイデガーの哲学的構想の中で、言語論へと傾く彼の構想の中心となったのである。そもそも、ハイデガーの構想の中心をなす現存在（Dasein）自体、世界内存在（in-der-welt-sein）の空間性を示唆する概念であった。Dasein の空間性から、言語の場所論への変化が、転回の核心をなしているとさえいえるかもしれない。

世界は、言語が体系として配列されている場所である。場所におかれた言語こそが意味を決定し、自己はその中で生きるのみである。自己の意図や意志以外に、自己の投げ出された世界の意味を決めるメカニズムを求めようとして、言語に行き着いたのである。言語の体系としての場所は、Dasein を通して姿を現すことによって様々な様相の世界として表象するかもしれないが、その様々な様相の起源は一つに辿ることができるので現存在の世界は一つしかない。しかし、この言語を自分とは独立に予め与えられているシステムとして捉えることによって、形而上学に逆戻りしてしまった。

（3）西田幾太郎

西田幾太郎が、「場所」の論考に至ったのも、現象学的な関心からであった。

『従来の認識論が主客対立の考から出立し、知るとは形式によって資料を構成することであると考える代わりに、私は自己の中に自己を映すという自覚の考から出立して見たいと思う。』

自己と、自己を映す場所との関係は、ハイデガーの現存在のメタレベルとオブジェクトレベルとの関係と一見似ている。しかし、ハイデガーはあくまでも主観中心の超越論的現象学の立場を崩さない。世界という実在が厳然と自分の外にあって、その実在にふれることのできない主体が、自分の認識装置を使って、その世界についての自分の世界像を形成しているという認識モデルを取るのに対して、西田では、自分と独立の世界などそもそもなく、自分は実在として存在する世界と一体であり、世界とは自分がそこにあるところの世界そのものだという世界観を取る。ハイデガーでは、主客の対立構造は残したままで、しかし、客観を客観そのものとして捉えることは無理だというスタンスから入り、自分という存在は、世界を捉える認識装置の実在性の一点にその存在性を帰属させている。本当に関心があるのは、自分の認識装置は限られているのに世界全体がどうなっているのかを知るにはどうしたらいいのかといった問題意識なのかもしれない。一方、西田では、初めから心身と精神という分裂、主客の対立がないという世界観から出発している。いま・ここにいる自分が於かれた世界こそが世界であり、自分の外に世界全体がどうなっているかを問うことには関心がない。むしろ、いま・ここにある自分という場所の限定を加えることによりより深い意味を探ることができるという態度である。重層的に重ねられた意識の総体は、限り無く沼のようになっているおり、限定をかけて、その限定の外は見ないようにする。

5 臨床の学としてのフィールドワーク

驚田清一が次のようなエピソードを紹介している。現象学を創始したフッサールが晩年にひとりの弟子にこうもらしたというのである。

「自分は幼少のころ、小刀をもらったことがあるが、その刃先があまり

「場についての試論」

鋭くないので、切れ味がよくなるよう、自分でそれを何度も何度も研いだ。が、研ぐことに夢中になっているうちに、気がつけば刃は何も切れないほどすり減ってしまっていた、と、そうして悲しげな表情をしたという。」

場の理論は、ファラデーの、ちょっと試みに等高線を表してみよう、という現場でのプラクティカルな工夫だったはずである。それを離れて、論理でがんじがらめのところまでできてしまった。場の理論を追求する試みが、期せずして、超・主観主義、独我論へ自らを追い込んで行ってしまふ。そして、場の方法論を追求すればするほど、場所から遠くなる。しかし、我々が、場という言葉から想像する印象は、複数の主体が相互作用を起こし、同じ時間・場所を共有しながら互いに接触しあい、いきいきと活動を行っているような状態のことではなかっただろうか。

鷺田はこうも言う。

「哲学にとっての〈場所〉というのは、たとえば哲学史においてしばしば〈主観性〉などと呼ばれてきた内面的な反省の場ではない。自分の内部に自分の意識や思考を映してみること（反射=反省という意味でのリフレクション）ではない。むしろ逆に、そういう内部的な場所への脱却あるいは撤退を許さず、主体が他者と同じ現在においてその他者とともに居合わせていて、その関係から一時的にもせよ離脱することなく、そこで思考しつづけることを要求されるような、そういう場所のことではないだろうか。」²³⁾

場はフィールドワークの場でもある。自分の中をのぞき込むと言う意味でのリフレクションから自分を引きずりおろして、研究対象そのものとの関わりにおいて考え続けることの重要性が改めて認識されるようになった。その中で、ガーフィンケルらのエスノグラフィーや、ゴフマンのシンボリックインターアクションなどの試みが重ねられ、フィールドワークが重要視されるようになった。フィールドワークとは、観察・分析者である研究

者が、研究対象との関わりにおいて思考をつづける場所のことである。Giddens が社会科学は二重解釈学的であるといったのはこの意味においてであった。Giddens ばかりでなく、Luhmen, Bourdieu など現代の(特にヨーロッパ系の)社会学者においては、社会学者はすぐれて現象学者でなければならないという共通認識が形成されて後に、いかに、自分がフィールドと関わるかという問題がでてきた。

6 我々はどうすればいいのか？

「場」という概念への関心は近年高まりをみせている。

ディマジオの新制度学派、また、ブルデューの知識経済学、また、新しい地理学と呼ばれる分野など、「場」或いは「場所」は一つのキーワードとなりつつある。

経営学についても、1980年代から90年代にかけて、野中・竹内が新製品開発組織における研究、さらに、知識創造研究において、また、またネットワーク論で、今井・金子が、場についてしばしば言及している。また、伊丹は場のマネジメントについての論考を一貫して、進めてきた。マーケティングの領域でも、80年代、石井の「意味の場」、また嶋口らの展開している関係性のマーケティングと呼ばれる領域、また、顧客間相互作用に関する研究などに関連して言及される機会が多くなってきている。さらに視点を広げると、戦略論では、企業ドメイン、アリーナといったコンテキスト、或いはゲーム論におけるコアの概念などが「場」につながる議論である。近年の産業集積研究、あるいは地域研究への関心の高まりから、この分野においても「場」への関心が高くなっている。さらに、インターネットの普及で、コンピュータ・ネットワーク上での相互作用に基づくコミュニティが発生し、その事態についても「場」という表現が使わ

「場についての試論」

れることも多い。

「場」が語られる領域の多様さを反映して、「場」によって説明されている内容は様々である。しかし、その一方で、メタレベルでの方法としての意義とともに語られる傾向が強い。つまり、個を中心に据えた方法では説明しきれない何かの説明をする際に「場」の概念が必要なのだという共通認識が成立しているようである。ただし、個々の領域で、「場」に操作性を持たせるために構成概念に落としこむ段階で、「場」は様々な方法論レベルでの地位を与えられることになる。

場の定義にはいくつかの典型的なパターンがあると思われる。

第一には、場は主体の認識のうちにあるというもので、現象学的な背景をもつ心理学にみられるアプローチである。第二は、主体の置かれた物理的な場所であるというもので、物理学や生物学、或いは、それらから影響を受けている経営学などにもみられる。第三は、主体間の相互作用の総体であるとするもので、構造主義に背景をもつネットワーク論にみられるアプローチである。第四は、主体間の相互作用の背景にある社会的な制度や権力構造などを指すもので、デュルケームの影響を受けたブルデューらの知識社会学などにみられるアプローチである。

それぞれの立場は、相互に独立なわけではなく、場についての既存研究ではいくつかを組み合わせている場合も多い。例えば、第二の物理的空間は他の立場と容易に結びつきやすい。地域研究や、研究開発プロジェクト論などは、第二と第三、或いは第四を組み合わせた場の説明を行っている場合が多いだろう。また、第三と第四とは、極めて近接している場合も多い。

しかし、一方で、認識論レベルでの方法論という観点からみたらば、4つの立場には、極めてシャープな方法論的な対立図式が織り込まれているのである。

①主知主義対実在主義の対立図式である。

主体の認識場に注目する第一の立場と、物理的空間に注目する第二の立場は、古の唯名論対唯物論の、或いは主観主義と客観主義の対立図式として捉えることが可能であろう。場は、個の意識の中にこそ存在するという立場に立てば、第二の立場は素朴な実体論で、個々の意味空間の多様性が捉えられないということになる。

②これに派生して、心理主義と行動主義をめぐる対立図式がある。

主体の認識に注目をする第一の立場と、第三・第四の、主体間の相互作用に注目する立場との間には、心理主義か行動主義かをめぐる問題についての対立が含まれ得る。これは第一の対立図式とも密接に関係するが、人間を理解する上で、心理学的なアプローチを用いた測定と、行動主義的アプローチを用いた方法でどちらがよりよいのかという問いをめぐる永遠の議論が持ち込まれ得る。場を研究する際に、個人に対する心理学的な考察を基礎にするべきか、測定された行動のパターンを観察者の目で観察すること、こそが基礎になるのかは、手法を選択する上でクリティカルな問題となり得るかもしれない。

③これに派生して、説明する対象をめぐる問題もある。

心理学アプローチをとるにせよ、行動主義的アプローチをとるにせよ、個をあくまでも説明の中心に据えるのか、多数の個の集合を説明の中心に据えるのかという問題である。個を説明の中心に据えれば、個と個がいかに意味理解ができるのか、場の共有とは何が起こることなのかを説明する、間主観性の議論が必要であろう。多数の個の集合を対象にする場合、どのような状況に基づいて、これらの個の集合は場を共有しているといえるのか、が説明できなければならないであろう。

④事前主義対事後主義とでもいうべき対立もある。これは、第三と第四の立場の違いに典型的に表れる可能性がある問題である。第四の立場が、

主体間の相互作用の背景にあって、主体間の相互作用を生じせしめている社会的な制度や権力構造などを説明することに関心をおくのに対して、第三の立場では、そのように現象の生じている現場とは独立にアприオリに存在する要因をいかに排除し、現象そのものの中に因果関係を見いだそうとすることを至上目的とする場合がある。場をもちいるのは他の何かを説明するためであり、場がアприオリに存在するとのか、場そのものが説明の対象であって行為者の相互作用の結果場が事後的に形成された、或いは研究の結果、場は何かを現象に即して明確に説明できたとするのかでは、場に対する取り組みに大きな違いがあるだろう。

さて、このような問題に直面し当惑した研究者が取り得る姿勢は、大きく2つに分かれるだろう。

一つは、場の概念そのものの統一性にこだわることはやめて、場を、自分の持ち場（フィールド）に特殊な現象の説明に用いることを目的として、ローカルな知識の形成と蓄積を目指す姿勢である。今一つは、このような場の概念の多様性の理解に取り組むことを敢えて試みようとする姿勢である。

前者の場合、場の概念の正当性は、現実の現象のロジカルなコンシステンシーと実証研究の手続の正当性によって間接的に与えられるであろう。メリットは、現象に即して着実に研究を積み重ねていくと、徐々に場の概念に近づいていく可能性が開けていることである。しかし、問題点は、ローカルなフィールドにおいてのみ適応可能な操作概念になった場合に、それがどのレベルで正しい言明なのか、正当化するのが困難であるという点である。これは、場の研究に限らず、単一事例研究全般に言えることであるが、そして、（やはりすべての単一事例がそうであるように）一般性を獲得するのは難しい。取り得る戦略は、多くの人の興味をひく領域を領域として選ぶことにより、ローカルノレッジが共有される範囲を少

しでも広く取ること、或いは多くの研究者が研究をしている領域を選び、他の説明と矛盾がないことを確認することくらいであろうか。

場のフィールド・リサーチにあたって、特に注意が必要なのは、場という日本語が極めて容器性が高い言葉であるという点である。これは研究をする上で一面便利なことでもある。インタビューに応じてくれた人は、非常に安易に、「場」という言葉を了解し、その了解に基づいて自分の体験を語ってくれるからである。また、研究者自身も、誰がどのように意志決定したのか、論理のつじつまのあわないところを、取りあえず「場が決めた」と記述することによって、少なくとも一時的に解決することができる。容器性の高い言葉にいろいろな内容が詰め込まれるので、他人とのコミュニケーションにおいても、自分の論理的思考においても、無矛盾に現象の説明ができてしまうが、その実、場自体の理解は進まないというディレンマがつきまとうのである。そして、多くの「方言」が生じてしまう可能性がある。やっかいなのは、同一の事物に対して、多くの「方言」が存在するのではなく、多様な事物に対して「場」という単一の言葉を当てはめてしまい、その結果、言葉が通じなくなるということが起こると、お互いのコミュニケーションは難しくなり、ますます閉鎖的になる可能性がある。

さて我々には、今一つ、このような場の概念の多様性の理解に取り組むことを敢えて試みようとする道が残されている。この姿勢は、労多くして益が少ない可能性が高い。物理学から哲学や心理学におよぶ領域での研究で用いられている場の概念について、深いレベルで理解した上で、その差違を相対化するというのは途方もなく大変な作業だからである。結果、表面的な理解に終始せざるを得ない。

表面的な理解では、なぜ差違が生まれてきたのかを相対化するところまではいかに、差違があることまでをせいぜい理解するに終わる。そうすると、シンクレティックな状況はいっこうに解消されない。或いは、表面

「場についての試論」

的な理解のまま、概念だけをアナロジーとして、他の分野から取ってくるということがおきる。しかし、単なる表面的な理解のままで、他の領域に移植しても、その表面的な理解のレベルを超えることは困難であろう。

これまでの考察を踏まえた上で、敢えて後者の立場に立って、場の現象学的な説明を試みてみたい。現実の現象を説明するというスタンスを取りたいと思う。それは、社会科学における研究における方法論を問うという作業を行うことになると考えるからである。

III 場とは何か

1 場の定義

(1) 「主体」と場

かつて中村雄二郎が端的に述べたように、「場」は「主体」の対立概念²⁴⁾である。このようなステイトメントによって「場」に迫ることは、「主体」とは何かを考えることでもある。

「主体 (subject)」の対立概念 (あるいは対概念) は、「客体 (object)」である。「場」が「主体」の対立概念であるとは、より正確に言えば、「主体-客体」図式に対する対立図式だという意味である。主体-客体図式では、主体の思考の世界と、実在の世界とを二分して捉える論理構造を持たざるをえない。形而上学でも、それを逃れようとした科学でも、結局二分法はついてまわり、その2つの結合が難しい。主-客の対立図式によらないとは、「対象化するもの」と「対象化されるもの」とを分離しないことである。

「場」とは、身体と精神を備えた個の意識作用が対象に向き、対象に働きかけることによって対象が存在している状態である。そして一方、「場」

とは、対象が存在することによって、逆に個も成立している状態、つまり、対象化するものと対象化されるものとが、その意識作用の働く一点においてお互いを規定しているような状態²⁵⁾のことを指す。

生活世界において、彼／彼女は、空間におかれた極めて多様な情報のキャリアーへと露出されていることになる。しかしこれらの情報のキャリアーはそれ自体で世界を構成するわけではない。情報のキャリアーは、情報をキャリアーするだけで、情報そのものではない。それらの情報のキャリアーから潜在的に発信されうる情報が実際に発信されるかどうかは、彼／彼女の情報解釈コードに依存しているからである。実際に同じ空間におかれていても、生活世界の意味の構成の仕方は、人によって異なっている。そして、行動を通して、情報の解釈コードを修正したり、新たに獲得したりし、自分の意味空間を作り替えていくのである。

(2) 知覚の場としての身体：心身合一

しかし、「主体」の今一つの対立概念として「身体」をもちだすこともできるだろう。

「場」が、「主体」の対立概念であるとは、精神と肉体とを二分して考える心一身二元論に対する対立概念であることを意味している。この場合、場とは、身体を通して世界が我々に現前している状態であり、世界が我々に身体化されて知覚される状態を指す。いわゆる心身論といわれるこの立場を展開したのはメルロ・ポンティである。我々は、ありとあらゆる身体器官を通して現象を知覚しており、様々な身体器官への刺激は統合されて現象として知覚される。見るだけで滑らかな布の触感を感じることができるし、また、触るだけで、つややかな布の光沢を見ることができる。この場合、我思う主体が、身体知覚に先だって知覚するわけでもないし、また身体知覚が我思う主体に還元された後知覚が発生する訳でもなく、身体全

体で知覚するのである。

これをメルロ・ポンティは、「我知覚す」je perçoisではなく、「私のうちで誰かが知覚する」on perçoit en moiと表現する。いわば、無数の知覚する主体が私の身体に張り付いていて、身体はそれらの感覚主体が散らばっている場なのである。その場合、知覚する我とは、知覚の場としての身体であろう。さらに、場としての身体は、皮膚で被われた肉体の中のどこかにとどまる訳ではなく、遠くに聴こえる鳥の鳴き声や、香り、ブラウン管に映し出された映像といった対象に志向することにより、現象に身体を開いている。場とは、身体が知覚するあらゆる刺激によって構成される世界そのものであり、場において、現象は身体と一体化されるのである。身体感覚を通して、現象は私の身体の外に広がりながら、しかし、我によって一つにつなぎ止められているクラインの壺のような存在の仕方をする。

2 場と他者：交換・コミュニケーション

(1) 場における他者：間主観性

「我思う」主体を中心に考えると、他者性も意識や思考を中心に考えざるを得ず、他者の思考について私が思考しなければならず、永遠に他者に触れることはできない。

対象化する意識を主体としたフッサールをはじめとし、他者性の問題は、哲学の悩みの種であった。フッサールは、Einfühlung（自己投入）という概念を用いて、他人の肉体に自己を投入して他我として理解しようとするとして説明したが、これは、自己の鏡像でしかないだろう。意識や思考から説明する方法を採ると多かれ少なかれ同じ様な説明になってしまう。

身心合一の場という立場から説明するとき、他者は、やはり心身をともなった対象であり、肌や髪で被われ、表情を有し、手振り身ぶりをし、声

色を用い、また臭いを発する身体であり、場におかれたその身体を用いて、我々の身体に働きかけてくる。

メルロポンティはこれを「間身体性」と呼んだ。

「我思う」ではなく「私のなかで誰かが知覚する」と捉えなおすと、自分の意識の中に閉じこもるのではなく、自分を開くことになる。そして、それは他者にも自分を開くことの第一歩なのである。「他者が考えていることについて考える」のでは、結局自分が考えているのだから、結局自分へのリフレクションになってしまう。しかし「私の中で誰かが誰かを知覚する」ことから、「やりとり」が生まれるのである。我々は「彼が見ているのを見る」ことにはリアリティーを感じられるが、「彼が考えているのを考える」ことにはリアリティーを感じられない。²⁶⁾ 言語というシンボル形式が意味を伝達できるのも、実は、場における間身体性がリアリティーを確信させるからである。

例えば、2人の人間が同じ場所に座って、青い空を見ているとする。「空が青いね。」「そうだね。」と語り合う2人は、青い空を感覚対象として含んだ物理的対象を共有し、青い空によって構成される意味空間を共有していて、自分も空の青さの意味を理解し、また、相手も空の青さの意味を理解していることを了解している。

客観論では、青い空という外在的な物理的実在が存在することが、2人の共通理解の基盤である。しかし、主観論的にみると、相手が自分と同じ感じ方で空の青さを知覚しているのか、空の色の知覚と青という色を表現する言語との対応は相手にとって何を意味しているのかを、最後までそれ自体として直接に確かめることはできないと疑う。自分には赤と見える感覚で彼が知覚していて「たまたま」それを青と呼んでいるかもしれないのではないかと。

場においては、その「たまたま」こそリアリティーが実現されている。

「たまたま」には、間身体性を伴う2つの事態が結合されなければならない。「彼が空を見ているのを見た」という事態と、「彼が青いと発声するのを聴いた」という事態である。この二つの事態と、自分の知覚（空の青さの視覚）とが結びついて初めて「彼が空が青いと感じている意味」をありありと感ずることができるのである。「彼が空を見ていた」「彼が青いと発声した」のを自ら知覚したことが生々しいリアリティーを作りだしている。「昨日空を見が青かった。」と事後報告を受けるのとは著しく異なる。

他者の知覚や思考それ自体は不可知である。他者が「認識された物理的実在」に対してどのような言語表現をするか、それも不可知である。しかし、「認識された物理的実在」と「恣意的な言語表現」とのたまたまの結合の場面を捉えることによって、我々は、他者とリアリティーを伴った体験を共有することができる。共通の感覚が絶対に得られないことに絶望する必要はない。「空が青い」に含まれる意味理解は、全く損なわれないのである。場とは、「認識された物理的実在」と「恣意的な言語表現」との関係を描き出すことである。

「シニファン（意味するもの）」と「シニフィエ（意味されるもの）」との結びつきはそもそも恣意的であるとすれば、他者の理解を理解するためには、相手にとっての「シニファン（意味するもの）」「シニフィエ（意味されるもの）」の結びつき方と、自分にとっての結びつき方の連関関係の翻訳をそれぞれが自分にとって意味をなす形で獲得していればよい。情報の解釈コードが共有されているとはこのことを指す。場の共有の度合いが増すとは、このように共有された解釈コードがきめ細かく張り巡らされていくことを指している。

ソシュールは、彼の構造言語学のモデルの着想を、ワルラスの交換過程モデルから得たと言われるが、そのことが象徴的に示しているように、記号とその意味内容の伝達過程は、モノの交換過程と同型の構造をしている。

個人の感覚に直結した意味空間をそのものとして他者が感じることはできないにも関わらず、場の「共有」という表現が可能なのは、我々は、情報の解釈コードの獲得によって、(一般的な意味では)意味を共有したと思えるからである。

ただし、ソシュールが「シニファン」と「シニフィエ」との関係が成立する背景としてみたのは、それ自体が堅固でスタティックな言語の構造であった。しかし、我々は、ここでは、そのような構造主義の見方を取らない。むしろ、「シニファン」と「シニフィエ」を結びつけるルール自体が相互作用のプロセスで作りに出されるという見方を採る。場はそのためにこそ、重要な役割を果たし得る可能性のある概念である。

個人の感覚に直結した意味空間をそのものとして他者が感じることはできないにも関わらず、場の「共有」という表現が可能なのは、我々は、情報の解釈コードのきめ細かい翻訳のリンクを張り巡らせることによって、意味を共有したと思えるからである。言ってみれば、「シニファン」と「シニフィエ」の結びつき方自体をコミュニケーションしているのである。情報の解釈コードのきめこまかやかな翻訳能力がいかに獲得できるかと言えば、モノやコトを介したコミュニケーションをいかに厚く持てるかにかかっている。

「シニファン」「シニフィエ」との結合の仕方は、他者との関係で決定されるとすれば、「シニファン」と「シニフィエ」との結合が生じる状況を同時に体験する頻度が高ければ翻訳の精度は上がる。物理的な空間の共有によって、極めて多様な事物が情報のキャリアーに成り得る。物理的な空間を他者と共有することにより、我々は、物理的な空間におかれた事物に対する理解を通して他者を、他者を通して事物を理解し、より豊かな意味を読みとれるようになるのである。場とは、このような意味のコミュニケーションが生じる状況なのである。

(2) コミュニケーションのメディアとしての場

身体は、知覚を受け取る受容体であるだけではなく、他者の知覚に対してメッセージを発信する発信源でもある。身体は、声を発生し、文字、図式を描き、身ぶりや手振りを通して対話を行う。コミュニケーションされた内容は、声や、文字、表情などの形式を伴う。人間の伝える情報は、単にビットとしての情報として伝えられる訳ではなく、コンテクスチャルな意味を伝える。しかも発信するときにアクティブになるのではなく、自分が知覚しているときにもうなずいたり、ほほえんだり、怒ったりしてメッセージを共時的に発信し続ける。何もしない、黙っていることすら、意味を伝える。また、人の集団はそれだけで、おおいに情報をキャリーする。注目を喚起し、関心を導き、興奮させる。群れができていれば自分も覗きたくなり、自分自身が群れを作る一端を担うことになる。身体は高度に双方向性を持つメディアなのである。

また、言語を用いる場合でも、場におけるコミュニケーションという設定が、言葉を補完し、意味を付加する。書かれた言語にも場面支配はあるが、話された言語は大きく場面支配を受ける。声や、文字という形で表現されたテキスト自体は、論理的な形式を備えていないかもしれないが、声色や、表情、身ぶり、手振りといった他のシグナルが意味を補完することがある。対話がなされる相手との関係性が反映されているかもれない。

日本語は極めて場面支配的な言語だという。場面支配的な言語という意味は、対人関係や状況のつくりだす場面によって、多くの語の省略を許し、また、敬語や、女言葉・仲間言葉という形で、語り口のモードを切り替えることである。その言語の目的、状況によっても異なる。契約書や命令などの場面では、読み手の解釈の余地を許さないように論理的なフォームを取るような様式が選択され、詩や演劇などでは、逆に読み手の解釈にゆさぶりをかけるような挑戦的な様式が選択される。

論理はそれ自体で存在できず、言語形式を取らなければ存在できないけれども、言語は必ずしも論理形式をとるとは限らない。論理形式を取らないからと言って、それは言語でないということとはできない。言語は論理的であるとは限らない。

(3) 意味と交換

主一客二元論に立つと、意味空間の形成メカニズムは、普遍的な意味構造か私的な意味構造か（或いは、文化に依存した意味構造かアナーキーな意味構造かという対立図式）のどちらかで説明しなければならない。

普遍的な意味構造モデルとは、意味の構造には普遍的な構造があり、個は自己の認識能力を使ってその普遍的な構造を学びとるというモデルであり、一方、私的な意味構造モデルとは、個は自己の意味の構造を自分の主観に従って作り上げるのだから、そもそも意味空間とはパーソナルなものであるとする見方である。普遍価値モデルによれば、個と個の意味の了解が可能なのは、普遍価値を通してであるから、個と個の価値の間についての解釈は必要ない。一方、私的価値モデルでは、厳密に言えば、個と個の意味の了解の可能性は閉ざされている。他者の意味空間そのものを、他者が了解しているのと同様に理解するのは不可能であり、自己の意味空間の範囲内で、あくまでも自己の世界に立ち表れた他者として了解しているにすぎない。他者が本当はどう考えているのか、どのように認識しているのかに関しては不可知であり諦めざるをえない。

場の考え方は、あくまでも個を基盤に考えるのであるが、個が独立に存在するのではなく、事物や他者とともに同じ生活世界に於かれていると考える。生活世界は、シュッツの概念であるが、単に、字義通り生活している空間のことを指すわけではない。人間が生活することによって獲得した解釈コードによって意味を獲得した空間、という意味を含んでいる。個は

何らかの生活世界の中に済みこんでおり、自分の解釈コードにかきこまれた地図を頼りに行動するであろう。普遍価値モデルと違うのは、個が意味を獲得できるのは、あくまでも自分のおかれた事物や他者との対話が起こる場においてであり、予め決まった普遍価値というものなどそもそもあり得ないと考える。また、人間は一人では意味を形成し得ないと考える点では、私的価値モデルとも異なっている。子供が言語を修得するのは他者である親とともにある場においてであり、それがなければ言語能力は開花しないであろう。

例えば、サイモンの強い影響下に消費者行動モデルを構築したハワードは、意味空間には referential structure と、value structure があり、個はあるモノが何であるかの判断には referential structure を、その価値の判断には value structure とを用いて意志決定をすることを考えた。referential structure は、あたかも、動植物の系統分類図のように一般性が高く、広範囲の人々に共有されているが、value structure は、個人の価値を反映したものであり、極めて個別性が高いものとされる。

ハワードはチョムスキーにしばしば言及しているが、生成文法の応用が随所に見られ、チョムスキーの思考の特徴が反映されている。チョムスキーは表現された言葉の下に潜伏している深層構造 (deep structure) のみを考えるべきだと主張し、いくら多様な表現が可能であっても、深層構造は普遍性をもつ論理形式で記述できるから、言語につきものの属人性や、社会性を排除することができると主張した。意味とは、生成文法によってあぶりだされた論理そのものであり、論理そのものが普遍的体系を持つために、コミュニケーション、交換を必要としないモデルなのである。

ハワードの referential structure も、個人の意味解釈とは独立に普遍的にあるかのように想定され、個人の行動は、群盲象をなぞるかのようにその referential structure の部分の一つづつ明らかにしていく作業であ

ると説明されている。ここには、解は、個人の解釈とは独立に存在し、その解にどうやったら効率的に行き着けるかというシャノン流の情報の考え方が反映されている。

しかし、一方で、ハワードは、人々の購買行動を左右するのは value structure だと述べるのだが、その実、value structure に基づいた説明は行わず、referential structure で押し通してしまう。²⁸⁾ 価値や文化の問題を普遍価値システムや情報処理アプローチで取り扱うことには限界があることが示唆されている。この点への不満から、Holbruck らは、個人の価値にクローズアップするべく情報処理アプローチを棄却している。

我々は、あくまでも個の意味空間に焦点を当てるのだけれども、その意味空間が文化や社会からは独立に存在しないと考える。しかし、同時に、何か超然とした社会があってその社会から直接支配を受けるわけではなく、場におけるやりとり一交換或いは、相互作用のプロセス—にこそ、意味空間が形成されると考える。

仮に個人の解釈とは独立な referential structure があるとしても、個人はそれを解釈しなければならず、自分の意味空間の中に referential structure を学習し了解した上での構造をつくるはずである。従って、その referential structure を解釈する仕方に依存している。この解釈の仕方こそ、文化や社会に特殊なものであり、また個人に特殊なものであろう。しかし、deep structure は多層的であって、その多層性がどのように構成されているかは、文化や社会に依存し、また個人に依存する。

ここで「主体」モデルに立脚して考えると、究極的には普遍的な価値構造としての referential structure か、私的な構造としての value structure のどちらかに偏った世界観に立脚することである。つまり、複数の主体には普遍的な価値の構造が共有され、私的価値はその普遍的な価値の構造の上に乗っていて、私的価値は普遍的な構造との関係で決まると

いう客観モデルか、それと反対に、普遍的な価値構造などは決してあり得ず、他者との共通理解は幻想にしかすぎないとする主観モデルかのどちらかである。しかし、他者との共通理解がないとすれば、いかに交換が起こるのか。ただ、個がバラバラに無関係に交換するのか。主観主義に立つのであれば、異なった価値システムを持つ主体間に交換が起こるメカニズム²⁹⁾を説明しなければならなくなる。カール・メンガーの死後息子K・メンガーによって編集された『経済学原理』は、欲望論から始められており、個の主観を中心とした壮大な社会科学の体系を構築しようとした思考の後が読み取れるという^{30) 31)}。この点こそ、主観主義がテストされる部分である。

3 場の共有

(1) 重層的な意味世界

場は、意味に向かう力である。主体において、現象に対する指向性³²⁾を持った知覚と現象とがわかちがたく絡み合っているような状況である。知覚自体でもないし、知覚を成立させるような物理的実体そのものではない。物理的実体そのものは「情報のキャリア」となり得るけれども、知覚がそれに向かわなければ存在しないのと同じである。しかしまた同時に、知覚そのものは、現象への志向性によって知覚足り得るのだから、指向性の契機となる「情報のキャリア」がなければ知覚自体としてはなりたない。それがどんなに小さなものであってもある物理的空間を知り尽くすことは不可能である。空間の意味は、物理的実体によって定まるわけではなくて、人間によって与えられるからだ。空間の意味は、物理的に空間にあるのではなくて、人間の方にある。したがって、人間の意味を捕まえる能力こそが物理的空間を作っている。その意味で、物理的空間は、一辺数メートルの立方体というような箱自体というよりは、海のように深い。空間におい

ては、あらゆるものが潜在的に「情報のキャリア」と成り得るけれども、それは人間の意味を捕まえる能力に依存している。知覚の働きを促す志向性に加えて、意味を解釈する力が人間に備わっているからである。意味を解釈する力の程度によって、同じ物理的空間は薄っぺらなものになったり、限りなく深いものとなったりする。個がそれまでの人生で獲得した知識が「情報の解釈コード」を提供している。「情報のキャリア」は潜在的なものであって、「情報の解釈コード」がなければそこから意味を読みとることはできないのである。

さて、個人がたった一人で場におかれた場合であっても、場から読みとっている意味は違う。志向性は様々な対象に向かい得るから、どれに注意が惹き付けられるのかは極端に言えば一瞬一瞬違う。主題によって変化する。その都度、場に接触する「情報の解釈コード」は変わり、異なったものが「情報のキャリア」となるかもしれない。重層的な意味空間をその時その時で組み変えているのである。

(2) 多対多の相互作用

たった一人で場に於かれる場合であっても、その個人が於かれている意味空間は重層的である。他者とともに於かれた場では、他者の意味空間がそこに加わることになる。先ほど述べたとおり、場におかれるということは、たとえ言葉を発しなくても、そこにいるだけで相互作用が可能だということである。相手が何を見ているのか、何に触れているのか、どこに座っているのか、どこに移動したのか。そのような存在としてだけでも他者は十分に「情報のキャリア」たりえ、我々は、その行動から意味を読みとる。そして、他者とともにある場でも、意味空間は重層的である。

相互作用がおこるのは、重層的な意味空間のどの次元を切り出すか、どの主題について、どの文脈においてその場が意味を持つのかといった契機

を、場におかれた自分と相手とがともに捉えられるからである。その微妙な機微がうまくいくために相互作用が密になりえる。

「場の共有」が起こるとは、「情報のキャリア」の共有がおこり、整合性のとれた「情報の解釈コード」が獲得されることである。情報のキャリアの共有や情報の解釈コードの整合性であって、情報そのものの共有ではないという点が、極めて重要である。場の共有は、単なる物理的空間の共有でもないし、共同主観と単純に言い表されるような意味空間の共有を意味しているわけではないからである。

「主体」中心の説明における相互作用では、「主体」と「主体」の間の一対一の相互作用が基本的なユニットであるが、場による相互作用は「多対多」の相互作用である。「主体」中心の説明では、それぞれの因果関係もあくまでも一対一の相互作用を基本にして、その総計として考えるが、場による相互作用では、相互作用の対象が特定されているわけではない。そこで個が読みとっている情報は、送り手と受け手のリジッドな一対一の関係において成立するような「意図された」情報ではない。相互作用の対象も、プロセスにおいて選択していかなければならないような「多対多」の相互作用なのである。

相互作用とは、行為者が、他の行為者の行動との連関を取りながら思考し、行動することである。口頭での議論に基づく直接的なものから、同じ事物を見たり聞いたりといった経験を媒介にコミュニケーションを行うという間接的なものまで、多種様々な相互作用の形がある。しばしば言語を介さない、不特定の相手となされるコミュニケーションが重要である。要するに多対多の相互作用では、何が主題になるのか、誰が相互作用に参加するのかが予め決まっている訳ではない。常に相互作用の主題と、参加者が変動しているのである。その相互作用に参加するためには、主題と参加者を捕まえないといけない。逆に、主題と参加者が何かを捕まえる契機

を捉えられるから、意味理解が可能なのである。それがわからなければ、行為者がでんでらばらに行動するカオスとなってしまう。

多対多の相互作用にも関わらず、秩序が生まれるのは、主題と参加者に関しての契機がシンボリックに与えられているからである。意味空間は限りなく重層的である。そのため、何についての場なのか、(主題)と何と何が、或いは誰と誰が関係するのか(主体)についての制約条件を設けているわけである。この制約条件が場のバウンダリーを形成する。

4 場における相互作用

(1) プロセスとしての秩序

場の理論の醍醐味は、行為者の相互作用の説明、さらに相互作用の結果として生まれる秩序の説明にある。通常、秩序という言葉のイメージは静的である。しかし、場における秩序形成は動的である。常に作り出されているから、プロセスとして記述するしかない。

行為者が何のために場において「相互作用」するのかと言えば、全体との関係で自分の行動を決めたいからである。自分だけでは行動を決められず、「相互作用」を行うことによって、情報のインプットを受けて意味空間を修正し、納得のいく解釈を行った上で行動を決めたいからである。それだけでは、サイモン流の情報処理モデルと同じ説明のようであるが、場における相互作用が、情報処理モデルと異なるのは、自らが情報秩序をつくり出している点である。決まった解が自分とは独立に存在して、その解に達するためにどのくらい効率的な情報インプットを行えばよいのかという、シャノン流の情報理論に基づいて組み立てられている情報処理モデルとは異なって、決まった解がない場合にどうするのかという状況における問題解決こそが、問題になる。つまり、個の情報処理モデルを超えて、個

をふくむシステム全体が作り出す情報秩序を説明することが我々の関心にあるのである。

我々の考える場における相互作用のモデルには、リフレクティブな構造が含まれている。自分の行動が全体の秩序の一部を構成しているからである。そして、そのようなリフレクティブな側面があるからこそ、行為者の行動とは独立に結果が決まらない。だからこそ、今・この相互作用に身をおいて、情報を読みとることが重要になってくる。

場における相互作用のリフレクティビティについては稿を改めなければならないが、その前に、なぜ、マイクロ＝マクロ問題が、場的な問題になるのかを考えてみることにしよう。マイクロとマクロをつなぐプロセスは、従来どう考えられてきただろうか。

マイクロとマクロとの関係について、最も熟慮を重ねて論理体系を構築してきた社会科学の学問領域は経済学であろう。個の行動原則から出発し、社会全体の資源分配について説明するアプローチは、マイクロ＝マクロ問題に取り組む際の一つの典型をなしている。

例えば、新古典派経済学では完全市場を想定する。完全市場の場合、個の比重は、全体の市場に比べて極めて小さく、全体には影響を与えられないほど微少であると仮定される。しかも、マイクロの行動は独立である。すなわち、個々の行為者は、他の行為者との相互作用をいっさい持たず、価格のみをシグナルにして行動する。このとき価格がマクロ情報を伝えるのであるが、なぜ価格にマクロ情報が反映し得るかといえば、個々の行為者は、個としては全体に影響を及ぼせないけれども、個の集合が集計されると、集計レベルでマクロ情報を作り出すからである。この場合個の行動と、情報形成プロセスが切り離されている。自分の投票結果が出てくるまで行動を行わずにじっと待ち、結果が出た瞬間に一斉に行動する行為者が想定されている。抜け駆けをおこなって、さやとり行為や、投機的行動にでる

ことは強く禁止されている。時間に対する配慮がないモデルであるとも言えるだろう。例えば食料は腐ってしまうので無制限に蓄積することはできなかつたり、何らかの社会的な制裁があるなどというような条件によって、³³⁾ さやとりや投機的行動がブロックされるような条件が保証されている。

(2) 場のモデルへ

「場」は、まず何よりも、そしてあくまでも、ある個にとっての意味空間、物理的空間なのであるが、他の個と意味空間や物理的空間を共有することによって、場の共有と呼んでもよい状況が生まれ得る。その場合、当該の固体間の相互作用が促進され、他者に依存した行動をとる必要があるような場合に、その行動を取りやすくし、個々の行動の結果として、全体の行動が整合性のあるものへと導かれることになる。逆に言えば、多くの主体による複雑な相互作用というような現象を取り扱う場合、主体のシステムではなく、場のシステムとして捉えた方が説明が容易になる可能性があることになる。社会科学にとって場の概念としての最大の魅力はその点にあると言えるだろう。

場の方法にとって最も本質的なのは、境界設定の問題である。主体のシステムであれば、主体という中心が点として一点に定まっているが、場は、定義的に「領域」として捉えられるので、領域の稜線としての境界が定まらなければ、無限に広がる物理的空間、とどまるところを知らない意味連鎖となってしまうのである。

だからこそ、実体レベルでの「容器性」が重要になる。

場が、山や川、或いは道路などの地理的環境、会議室・クラブハウスなどの象徴性を伴った建物、国境、行政区域など、委員会や会議などの社会的制度などの境界によって決まることが多いのは、多数の行為者が潜在的に参加する複雑な相互作用の範囲に意味・物理的制約をかけているのだと

考えることができる。

すなわち、主体の運動と知覚を可能にする物理的条件によって、意味空間は制約を受け、また、主体の意味空間によって解釈される程度において物理的な実体として存在しうる。ここで主体の運動と知覚とか、主体の意味空間という表現を行って、一見主体中心の説明を行ったようであるが、この場合の主体とは、先ほど述べたように、オブジェクトとして捉えられた主体であって、オブジェクトを観察している主体という意味ではない。従って、そこで、どのような主体が、オブジェクトレベルで場に関わっているかが重要になる。この主体は、複数でもいいし、また、状況に応じて入れ替わっても構わない。主体の範囲自体が変化してもいいのである。

主体の範囲は、何に応じて変化するのかというと、何についての場なのか、すなわち、もう一つのサブジェクトとしての「主題」に応じてである。

主体のシステムでは、主題は、主体が決定するものであるが、場のシステムでは、主体（サブジェクト）は範囲として与えられ、主体が主題を決めることもあるが、主題が主体を決定することもあり、サブジェクト（主体）とサブジェクト（主題）の相互規定関係で決まる。

このように対象化されたオブジェクトとしての主題と主題を、それぞれ、「アジェンダ (subject=主題)」、「メンバーシップ (subject=主体)」と呼んでいる。つまり、「アジェンダ」とは何についての場なのか、意味空間の範囲という点、「メンバーシップ」とは、誰が場におけるプレイヤーなのか、場の参加者の範囲という点で場の境界を形作っている。

即ち、「アジェンダ」「メンバーシップ」が相互に規定しあって、場の境界が決まる。この規定の方向のバランスは、場の性質によって異なる。例えば、市場における場であれば、「何に関する市場か」という「アジェンダ」が、「そこで誰と誰が競争するのか」という「メンバーシップ」のバウンダリーを決める比重が高いであろう。しかし、例えば、組織における

相互作用の場では、まず、「メンバーシップ」のバウンダリーで場の範囲が決まり、参加者の様々な知識のセットをもとに「アジェンダ」が決定される比重が高いかもしれない。

重要なのは、これらの境界があらかじめ明確に決まっている訳ではなく、また、いったん決まったら固定されてしまうという性質のものではない点である。アジェンダが修正されると（異なった主題の意味について）新しいメンバーが主体として場に加わってくるかもしれないし、メンバーが変わると異なったアジェンダが設定されるかもしれない。このように、「主題」と「主体」の2つのサブジェクトが相互に規定しうることによって、境界が常に新しく作り出されていくのが場における相互作用の特徴なのである。

注

- (1) Hughes (1958)
- (2) 桜井厚 (1980) 「A・シュッツの基本概念と生活史」
- (3) Polanyi, Karl 『経済の文明史』1975年平野健一郎によるあとがき
- (4) 木田元 (1970)
- (5) 木田元 (1970)
- (6) Lewin, Kurt (1943)
- (7) Einstein, Albert and Leopold Infeld, (『物理学はいかに創られたか』1939年)
- (8) Piaget, (『構造主義』1970年) 「古典物理学が、加速度、質量、仕事、エネルギーなどの概念にもとづいて、量的法則性を追求していたのに対し、新しい物理学では、測定以前の構造、つまり、可能な状態と変換の体系が、探求される。ここから、客観的世界の対象の因果的構造と、認識主体の操作の構造との対応関係が問題となるのである。」
- (9) Einstein, Albert and Leopold Infeld, (『物理学はいかに創られたか』1939年)

「場についての試論」

- (10) Einstein, Albert and Leopold Infeld, (『物理学はいかに創られたか』1939年)
- (11) 構造主義が、社会科学に与えたインパクトを考慮すれば、方法としての構造主義と方法としての場の理論とを比較してみることは意味のあることであろう。例えば、場の理論と近接した問題を取り扱っていると考えられるネットワーク論の中でも、その最も厳密に定式化された形式を尊重するタイプのそれは、最も構造主義的なアプローチを採っていると考えられる。
- (12) Piaget, (『構造主義』1970年)
- (13) 別の見方でみれば、構造主義にも極めて場的な要素が多く含まれているのである。構造主義を掲げた研究がすべて、「場」を対象に研究を行ったわけではないが、物理学の場が結果として獲得したところの、数学的「場」の表現を目指したのである。ただし、「構造」が、極めて空間的な概念であることから物理的な空間を分析対象に選択することも多く、Levi-StraussやMouseの場合など研究対象自体が場の理論にとって極めて示唆的である場合が多い。
- (14) 構造主義の最も正当な後継者の一つともいえるネットワーク論の研究では、果てなくネットワークのノードがつながっていってしまうように見えるのも構造主義の境界設定のメカニズムに対する無関心或いは方法論的困難の反映といえるかもしれない。
- (15) 清水博 (1999)
- (16) 沼上幹 (1994)
- (17) Arthur (1994)
- (18) 他者理解が不能、というところまでいかないとしても、自己言及状況を「語る」ことはできる。逆に、他者理解は不可能である、という立場にたつと、そのステートメントが、「嘘つきのクレタ人」のパラドクスに陥ってしまう。
- (19) しかし、だからと言って、当時のウィーンの人々が、価値や文化について無頓着だったわけではない。むしろ価値や文化の問題が彼らにとって深刻で重い問題であったからこそ、それを十分すぎるほどに慎重で、モデストな態度を示さなければならないという要諦でもあった。Janik (1973)
- (20) それでも、コンテクスト次第で人格も変える、場面で人格を演技するといった状況では、「私」を棚卸しして、「私」と対話しなければならないであろう。
- (21) 木田元 (1993)

- (22) 鷺田清一 (1999)
- (23) 鷺田清一 (1999)
- (24) 中村雄二郎 (1989), また, 伊丹 (1998) によれば, 個人の意志決定に対して, 情報の相互作用を取り上げることが場のマネジメントの本質だという。
- (25) 「主体」の対立概念のもう一つの側面として, デュルケームの集合意識, あるいは, 思想的にその系譜上にあるとも考えられるブルデューの権力場などが想起されるかもしれない。個人の力を越えて存在し, 個人に抗いがたい影響力を行使する力のようなものが想像されがちである。事実, 「場」という言葉が喚起するイメージは, 磁場, 電磁場などの力学な概念から端を発して, 日本語で日常的にいう「場の雰囲気」や「その場で決まった。」という表現などまで, そのような意味合いを多分に含んでいる。そのような全体図式の対極がアナキズムであり, 個はバラバラに存在していて, 他者との間にも共通理解など成立せず, 個々人は, 他人の行動を自分流に解釈して勝手に生きているという見方を取る。我々は, しかし, 集合意識として場を捉えるという立場も戦略的に取らない。つまり, 「個」対「全体」という対立図式で, 「主体」対「場」を捉えるわけではない。理由の第一は, 集合意識が個の意識や行為と独立に定義されるものだとすると, いわゆる「アドホックな説明」許しがちになり, 何でもよく説明できないことを詰め込む「ゴミ箱」概念になってしまう危険性があるからである。第二に, 集合意識を個とは独立であるとすると, 集合意識を決定している(個や, 個と個の相互作用以外の)要因を説明する必要が生じ, 場の説明を離れてしまうからである。(例えばブルデューの場合, 新興の社会階層化が, 最終的な説明変数である。)目的がそれに合致していれば問題はないが, 場自体を解明したいという目的を持つ場合には注意が必要である。我々の最終的目的は, 場という現象自体をよりよく理解することにあるので, 「場」という概念自体をブラックボックス化して扱うアプローチを極力避けなければならない。そのためには, 少なくとも, 礎石の一つとして個に主眼を於かなければならないだろう。個—全体という対立図式自体を避けなければならない。
- (26) 「相手が考え込んでいるのを見る」ことにはリアリティーがある
- (27) マイケル・ポランニーが言うように, 十分言葉で語り得る場合にすら, その言葉で示された内容そのものを知覚することはできないということである。もちろん重要なのは, それにもかかわらずなぜ我々は理解できるのかという点

「場についての試論」

である。Polanyi, Michael (1966)

(28) Howard (1977)

(29) この問題については、使用価値—交換価値をめぐる石井—石原論争がある。
石井淳蔵・石原武政編 (1996)

(30) 八木紀一郎 (1988)

(31) メンガーのプランは、彼が『貨幣の起源』で用いたのと同様の論理を用いて展開される予定だったと考えられる。すなわち、財の中でもより一般的に欲求されるものと、そうでないものがあり、それがグラデーションとなり財の体系を作っているのだという論理である。経済史家のカール・ポランニーは、このメンガーの第二版から大きな影響を受けて、近代における市場社会の成立の着想を得たと言われる。

(32) ここでの指向性は、フッサールの考えた現象に向かう志向性であるが、フッサールのように自らの意識野に立ち表れる現象にむかう指向性ではなくて、自らを抜け出て、自らの外に開けた現象に向かう志向性のことである。

(33) これはシャノン流の情報観と関係がある。例えば、サイモンの情報処理モデルは Administrative Behavior に見られるように、ハイエラルキカルな組織構造、或いは社会構造を想定していたから、情報処理の本質もハイエラーキーとして捉えられており、組織のモデルと情報処理のモデルが同じ構造をしている。Simon (1975)

〈参考文献〉

Adler, Friedrich (1918), *Ernst Machs Überwindung des Mechanischen Materialismus*, Wien : Verlag der Wiener Volksbuchhandlung Ignaz Brand & Co.

Arthur, Brian (1994), *Increasing Returns and Path Dependence in the Economy*, University of Michigan Press

新睦人・中野秀一郎編 (1984) 『社会学のあゆみ パートII 新しい社会学の展開』有斐閣

Ayer, A. J. (1985), *Wittgenstein*, London : Weidenfeld and Nicolson, 『ウィト

- ゲンシュタイン』信原幸弘訳，みすず書房，1988年
- Ayer, A. J. (1946), *Language, Truth and Logic*, London : Victor Gollancz Ltd.『言語・真理・論理』吉田夏彦訳，岩波書店，1955年
- Berger, Peter L. and Thomas Luckmann (1966), *The Social Construction of Reality-A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York : Doubleday & Company, Inc.『日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法』山口節郎訳，新曜社，1977年
- Bhaskar, Roy (1986), *Scientific Realism and Human Emancipation*, London : Verso
- Blau, Peter M. (1975), *Approaches to the Study of Social Structure*, The Free Press『社会構造へのアプローチ』斎藤正二監訳，八千代出版，1982年
- Blaug, Mark (1985), *Great Economists Since Keynes : An Introduction to the Lives and Works of One Hundred Modern Economists*, Wheatsheaf Books『ケインズ以後の100大経済学者—ノーベル賞に輝く人々』中矢俊博訳，同文館出版，1994年
- Bloor, David (1983), *Wittgenstein, A Social Theory of Knowledge*, The Macmillan Press Ltd.『ウィットゲンシュタイン：知識の社会理論』戸田山和久訳，1988年
- Bollnow, Otto Friedrich (1963), *Mensch und Raum*, Stuttgart : W. Kohlhammer GmbH,『人間と空間』大塚恵一・池川健司・中村浩平訳，せりか書房，1988年
- Boltzmann, Ludwig『統計力学』物理学史研究刊行会編，恒藤敏彦訳，東海大学出版会，1970年
- Boudon, Raymond (1969), *Les Methodes en Sociologie*. Presses Universitaires de France.『社会学の方法』宮島壽訳，白水社，1970年
- Boudon, Raymond (1986), *Theories of Social Change : A Critical Appraisal*, translated by J. C. Whitehouse, Cambridge : Polity,
- Bourdieu, Pierre (1977), *Algerie 60-Structures Economiques et Structures Temporelles*, Paris : Editions de Minuit『資本主義のハビトゥス—アルジェリアの矛盾』原山哲訳，藤原書店，1993年
- Bourdieu, Pierre (1979), *La Distinction-Critique Sociale du Jugement*, Edi-

「場についての試論」

- tions de Minuit『ディスタクシオン [社会的判断力批判] I』石井洋二郎訳, 新評論, 1989年, 『ディスタクシオン [社会的判断力批判] II』石井洋二郎訳, 藤原書店, 1990年
- Bourdieu, Pierre (1992), *Les Regles de L'art-Genese et Structure du Champ Litteraire*, Paris : Editions du Seuil, 『芸術の規則II』石井洋二郎訳, 藤原書店, 1995年, 『芸術の規則II』石井洋二郎訳, 藤原書店, 1996年
- Burgess, Ernest W. (1926), *The Urban Community*, Chicago : The University of Chicago Press
- Caldwell, Bruce J. (1982), *Beyond Positivism : Economic Methodology in the Twentieth Century*, London : George Allen & Unwin 『実証主義を超えて—20世紀経済科学方法論』堀田一善・渡部直樹監訳, 中央経済社, 1989年
- Campbell, Lewis and William Garnett (1884), *The Life of James-Clerk Maxwell with Selections From His Correspondence And Occasional Writings*, London : Macmillan and Co.
- Carnap, Rudolf (1966), *Philosophical Foundations of Physics*, New York : Basic Books, Inc. 『物理学の哲学的基礎—科学の哲学への序説』沢田允茂・中山浩二郎・持丸悦朗訳, 岩波書店, 1968年
- Carnap, Rudolf, 『カルナップ哲学論集』永井成男・内田種臣編, 紀伊國屋書店, 1977年
- Castells, Manuel (1989), *The Informational City-Information Technology, Economic Restructuring, and the Urban-Regional Process*, Blackwell Publishers
- Castells, Manuel (1996), *The Rise of the Network Society-The Information Age : Economy, Society and Culture-Volume I*, Blackwell Publishers
- Chomsky, Noam (1957), *Syntactic Structures*, The Hague : Mouton Press, 『文法の構造』勇康雄訳, 研究社出版, 1963年
- Crozier, Michel (1964), *The Bureaucratic Phenomenon*, The University of Chicago Press
- Deely, John (1990), *Basics of Semiotics*, Indiana University Press 『記号学の基礎理論』大熊昭信訳, 法政大学出版局
- Derrida, Jacques (1967), *L'écriture et la Difference*, Paris : Editions du Seuil,

- 『エクリチュールと差異 (上)』若桑毅・野村英夫・坂上脩・川久保輝興訳, 法政大学出版局, 1977年
- Derrida, Jacques (1967), *L'écriture et la Différence*, Paris: Editions du Seuil, 『エクリチュールと差異 (下)』梶谷温子・野村英夫・三好郁朗・若桑毅・坂上脩訳, 法政大学出版局, 1983年
- Derrida, Jacques (1972), *Positions*, Paris: Editions de Minuit 『ポジション』高橋允昭訳, 青土社, 1988年
- Descartes (1637), *Discours de la Methode*, 『方法序説』落合太郎訳, 岩波書店, 1953年
- Devlin, Keith (1994), *Mathematics: The Science of Patterns*, Scientific American Library, 『数学: パターンの科学—宇宙・生命・心の秩序の探求』山下純一訳, 日経サイエンス社, 1995年
- Durkheim, Emile (1895), *Les Regles de la methode sociologique*, Press Universitaires de France, 『社会学的方法の規準』宮島喬訳, 岩波書店, 1978年
- Einstein, Albert and Leopold Infeld, *Evolution of Physics*, 『物理学はいかに創られたか 上・下』石原純訳 岩波書店
- Elster, Jon (1989), *The Nuts and Bolts for the Social Sciences*, Cambridge; New York: Cambridge University Press 『社会科学の工具箱—合理的選択理論入門』海野道郎訳, ハーベスト社, 1997年
- Emerson, Robert M., Rachel I. Fretz, & Linda L. Shaw (1995), *Writing Ethnographic Fieldnotes*, Chicago: The University of Chicago 『方法としてのフィールドノート—現地取材から物語作成まで』佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳, 新曜社, 1998年
- Foucault, Michel (1970), *The Order of Things: An Archaeology of the Human Sciences*, New York: Vintage Books
- 藤田正勝 (1998) 『現代思想としての西田幾多郎』講談社
- Gardner, Howard (1985), *The Mind's New Science—A History of the Cognitive Revolution*, New York: Basic Books Inc. 『認知革命—知の科学の誕生と展開』佐伯胖・海保博之監訳, 産業図書, 1987年
- Giddens, Anthony (1984), *The Constitution of Society*, Cambridge: Polity Press

「場についての試論」

- Giddens, Anthony (1987), *Social Theory and Modern Sociology*, Blackwell Publishers『社会理論と現代社会学』藤田弘夫監訳, 青木書店, 1998年
- Giddens, Anthony (1989), *Sociology*, Cambridge: Polity Press
- Giddens, Anthony (1989), *Sociology*, Cambridge: Polity Press『社会学』松尾精文・成富正信・西岡八郎・藤井達也・子幡正敏・叶堂隆三・立松隆介・松川昭子・内田健訳, 而立書房, 1992年
- Glaser, Barney G. and Anselm L. Strauss (1967), *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Chicago: Aldine Publishing Company『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか』後藤隆・大出春江・水野節夫訳, 新曜社, 1996年
- Goffman, Erving (1959), *The Presentation of Self in Everyday Life*, Penguin Books
- Habermas, Jürgen (1984), *Vorstudien und Ergänzungen zur Theorie des kommunikativen Handelns*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main*『意識論から言語論へ』森元孝・干川剛史訳, マルジュ社, 1990年
- Habermas, Jürgen (1962), *Strukturwandel der Öffentlichkeit-Untersuchungen zu einer Kategorie der burgerlichen Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main.『公共性の構造転換—市民社会の1カテゴリーについての探求』細谷貞雄・山田正行訳, 未来社, 1973年
- Habermas, Jürgen and Niklas Luhmann (1971), *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie*, Suhrkamp Verlag『批判理論と社会システム理論』佐藤嘉一・山口節郎・藤澤賢一郎訳, 木鐸社, 1987年
- Haken, Hermann (1978), *Synergetics-An Introduction*, Springer-Verlag Berlin Heidelberg『協同現象の数理—物理, 生物, 化学的系における自律形成』牧島邦夫・小森尚志訳, 東海大学出版会, 1980年
- 原広司 (1987)『空間〈機能から様相へ〉』岩波書店
- 橋爪大三郎 (1985)『言語ゲームと社会理論—ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン』勁草書房
- 橋爪大三郎 (1988)『はじめの構造主義』講談社
- Hayakawa, S. I. (1963), *Language in Thought and Action, Fourth Edition*, Harcourt Brace Jovanovich, Inc.『思考と行動における言語—原書第4版』

- 大久保忠利訳, 岩波書店, 1985年
- Hayek, F. A. (1952), *The Counter-Revolution of Science : Studies on the abuse of reason*, The Free Press『科学による反革命—理性の濫用』佐藤茂行訳, 木鐸社, 1979年
- Hayek, F. A. (1952), *The Sensory Order*, London : Routledge & Kegan Paul Ltd.
- Hayek, Friedrich August von, 『市場・知識・自由』田中真晴・田中秀夫編訳, ミネルヴァ書房, 1986年
- Heidegger, Martin (1927), *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag Tuebingen
- Heidegger, Martin (1927), *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag Tuebingen
『存在と時間(上)』桑木務訳, 岩波文庫, 1960年
- Heidegger, Martin (1927), *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag Tuebingen
『存在と時間(中)』桑木務訳, 岩波文庫, 1961年
- Heidegger, Martin (1927), *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag Tuebingen
『存在と時間(下)』桑木務訳, 岩波文庫, 1963年
- Henning, Hans (1915), *Ernst Mach als Philosoph, Physiker und Psycholog*, Leipzig : Verlag von Johann Ambrosius Barth
- 廣松渉(1980)『弁証法の論理』青土社
- 広重徹・伊東俊太郎・村上陽一郎(1975)『思想史のなかの科学』木鐸社
- Hofmann, Paul (1988), *The Viennese-Splendor, Twilight, and Exile*, Anchor Books
- Hofstadter, Douglas R. (1979), *Gödel, Escher, Bach : an Eternal Golden Braid*, New York : Vintage Books
- Holbrook, Morris B. (ed.) (1999), *Consumer Value : a framework for analysis and research*, London, New York : Routledge
- Howard, John A. (1977), *Consumer Behavior-Application of Theory*, McGraw-Hill, Inc.『消費者行動 [理論の応用]』石川浩・川辺信雄・服部正博・八十川睦夫・横井義則訳, 新評論, 1982年
- Hughes, Henry Stuart (1958), *Consciousness and Society : the reorientation of European social thought, 1890-1930*, New York : Vintage Books, (Originally published by Alfred A. Knopf, Inc.)『意識と社会 : ヨーロッパ社会思

「場についての試論」

- 想：1890-1930』生松敬三・荒川幾男訳、みすず書房、1970年
- Husserl, Edmund (1954), *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, Martinus nijhoff, Haag, 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫・木田元訳、中央公論社、1974年
- Husserl, Edmund (1928), *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins*, In Band IX, Jahrbuchs für Philosophie und Phänomenologie der Forschung 『内的時間意識の現象学』立松弘孝訳、みすず書房、1967年
- 井筒俊彦 (1989) 『コスモスとアンチコスモス：東洋哲学のために』岩波書店
- 池内紀 (1992) 『ウィーンの世紀末』白水社
- 今田高俊 (1986) 『自己組織性—社会理論の復活』創文社
- 今井賢一・金子郁容 (1988) 『ネットワーク組織論』岩波書店
- 井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編 (1996) 『身体と間身体
の社会学』岩波書店
- 井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編 (1996) 『時間と空間の
社会学』岩波書店
- 石井淳蔵・石原武政編 (1996) 『マーケティング・ダイナミズム—生産と欲望の
相克』白桃書房
- 石井淳蔵 (1993) 『マーケティングの神話』日本経済新聞社
- 石川弘義 (1986) 『会議の心理学』筑摩書房
- 伊丹敬之 (1999) 『場のマネジメント—経営の新パラダイム』NTT出版
- 泉靖一編 (1980) 『マリノフスキー レヴィ=ストロース』中央公論社
- Jacobs, Jane (1984), *Cities and the Wealth of Nations-Principles of Economic Life*, New York : Random House Inc. 『都市の経済学—発展と衰退のダイナミクス』中村達也・谷口文子訳、TBSブリタニカ、1986年
- Jaffe, William (1954), *Leon Walras : Elements of Pure Economics or the Theory of Social Wealth*, London : George Allen & Unwin Ltd.
- Jammer, M. (1954), *Concepts of Space*, The President and Fellows of Harvard College, 『空間の概念』高橋毅・大槻義彦訳、講談社、1980年
- Jammer, M. (1957), *Concepts of Force*, The President and Fellows of Harvard College, 『力の概念』高橋毅・大槻義彦訳、講談社、1979年
- Janik, Allan and Stephen Toulmin (1973), *Wittgenstein's Vienna*, Gerard

- McCauley Agency, Inc. and Kern Associates. 『ウィトゲンシュタインのウィーン』 藤村龍雄訳, TBS ブリタニカ, 1978年
- 金子郁容 (1986) 『ネットワークへの招待』 中央公論社
- 金子郁容 (1990) 『〈不確実性と情報〉入門』 岩波書店
- Karl-Dieter Opp, Peter Voss, and Christiane Gern., *Origins of a Spontaneous Revolution: East Germany*, 1989, University of Michigan Press
- Kats, Elihu and Paul F. Lazarsfeld (1955), *Personal Influence*, The Free Press. 『パーソナル・インフルエンス・オピニオン・リーダーと人々の意志決定』 竹内郁郎訳, 培風館, 1965年
- Kern, Stephen (1983), *The Culture of Time and Space 1880-1918*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press 『時間の文化史—時間と空間の文化: 1880-1918年』 浅野敏夫訳, 法政大学出版局, 1993年
- 木田元 (1970) 『現象学』 岩波書店
- 木田元 (1983) 『ハイデガー』 岩波書店
- 木田元 (1991) 『現代の哲学』 講談社
- 木田元 (1993) 『ハイデガーの思想』 岩波書店
- 木田元 (1995) 『反哲学史』 講談社
- Kirzner, Israel M. (1986), *Subjectivism, Intelligibility and Economic Understanding: essays in honor of Ludwig M. Lachmann on his eightieth birthday*, Basingstoke: Macmillan
- Kotz, David M., Terrence McDonough and Michael Reich (1994), *Social Structures of Accumulation-The Political Economy of Growth and Crisis*, Cambridge University Press
- Kraft, Victor (1968), *Der Wiener Kreis, Der Ursprung des Neopositivismus, Ein Kapitel der Juengusten Philosophiegeschichte: Zweite, erweiterte und verbesserte Auflage*: Springer-Verlag, Wien/New York, クラフト 『ウィーン学団—論理実証主義の起源・現代哲学史への一章』 寺中平治訳, 勁草書房, 1990年
- Kripke, Saul A. (1982), *Wittgenstein on Rules and Private Language-An Elementary Exposition*, Basil Blackwell Publisher Ltd. 『ウィトゲンシュタインのパラドックス—規則・私的言語・他人の心』 黒崎宏, 産業図書, 1983年

- Lachmann, L. M. (1970), *The Legacy of Max Weber : three essays*, London : Heinemann
- Lecourt, Dominique (1981), *L'ordre et les Jeux*, Editions Grasset & Fasquelle, Paris, 『ポパーとウィトゲンシュタイン・ウィーン学団・論理実証主義再考』野崎次郎訳, 国文社, 1992年
- Lewin, Kurt (1920), *Die Sozialisierung des Taylorrsystems : eine grundsätzliche Untersuchung zur Arbeits-Psychologie*, Berlin-Fichtenau : Verlag Gesellschaft und Erziehung
- Lewin, Kurt (1943), "Defining the Field at a given Time", *Psychological Review*, 1943, 50 「“一時的場”の定義」 in 『社会科学における場の理論』第3章, 猪股佐登留訳, 誠信書房, 1956年
- Lewin, Kurt (1951), *Field Theory in Social Science : selected theoretical papers/by Kurt Lewin ; edited by Darwin Cartwright*, New York : Harper, 『社会科学における場の理論』第3章, 猪股佐登留訳, 誠信書房, 1956年
- Lichbach, Mark Irving, *The Cooperator's Dilemma, University of Michigan Press*
- Luhmann, Niklas (1968), *Zweckbegriff und Systemrationalität-Über die Funktion von Zwecken in sozialen Systemem*, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck) 『目的概念とシステム合理性—社会システムにおける目的の機能について』馬場靖雄・上村隆広訳, 勁草書房, 1990年
- Luhmann, Niklas (1981), *Wie ist soziale Ordnung möglich—from Gesellschafts Struktur und Semantik*, Suhrkamp Verlag, 『社会システム理論の視座』佐藤勉訳, 木鐸社, 1985年
- Luhmann, Niklas (1990), *Essays on Self-Reference*, New York : Columbia University Press 『自己言及性について』土方透・大澤善信訳, 国文社, 1996年
- Maanen, John Van (1988), *Tales of the Field-On Writing Ethnography*, The University of Chicago
- Mach, Ernst (1906), *Space And Geometry*, Cicago : The Open Court Publishing Co.

- Mach, Ernst (1894), *Populaer-wissenschaftliche Vorlesungen*, 5 Auflage, Leipzig, 1923 (Erst Auflage 1894) in 『認識の分析』廣松渉・加藤尚武編訳 1971年 法政大学出版局 また、『時間と空間』野家啓一編訳, 法政大学出版局, 1977年
- Mach, Ernst (1905), *Erkenntnis und Irrtum-Skizzen zur Psychologie der Forschung*, zweite durchgesehene Auflage, Leipzig, 1906 (Erst Auflage 1905), 『認識の分析』廣松渉・加藤尚武編訳 1971年 法政大学出版局 また『時間と空間』野家啓一編訳, 法政大学出版局, 1977年
- Mach, Ernst (1918), *Die Analyse der Empfindungen und das Verhältnis des Physischen zum Psychischen*, Verlag von Gustav Fischer, Jena, 『感覚の分析』須藤吾之助・廣松渉訳, 法政大学出版局, 1971年
- Mach, Ernst (1933), *Die Mechanik in ihrer Entwicklung-historisch-kritisch dargestellt*, 『マッハ力学—力学の批判的發展史』伏見讓訳, 講談社, 1969年
- Marrow, A. C. (1969), *The Life and Work of Kurt Lewin*, Basic Books, Inc. 『クルト・レヴィン』望月衛・宇津木保訳, 誠信書房, 1972年
- 丸山圭三郎 (1983) 『ソシュールを読む』岩波書店
- 松岡正剛・松島俊也・川村光・戎崎俊一・今井浩・北野宏明・中島秀之・橋田浩一・松原仁・海保博之・斉藤了文・塩沢由典・馬場靖雄 (1994) 『複雑性の海へ—生命から社会まで—12の扉』NTT出版
- Maturana, H. R. & F. J. Varela (1980), *Autopoiesis and Cognition: The Realization of the Living*, Holland: D. Reidel Publishing Company 『オートポイエーシス—生命システムとはなにか』河本英夫訳, 国文社, 1991年
- Mauss, Marcel (1968), *Sociologie et Anthropologie*, Presses Universitaires de France. 『社会学と人類学』有地享・伊藤昌司・山口俊夫訳, 弘文堂, 1973年
- Maxwell, James Clerk (1876), *Matter and Motion*, London: Routledge/Thommes Press
- McLuhan, Marshall (1964), *Understanding Media: The Extensions of Man*, New York: McGraw-Hill Book Co. 『人間拡張の原理・メディアの理解』後藤和彦・高儀進訳, 竹内書店新社, 1967年
- Menger, Carl (1883), *Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaft, und der Politischen Oekonomie insbesondere*, Leipzig 『経済学の方法』

「場についての試論」

- 吉田昇三改訳, 日本経済評論社, 1986年
- Menger, Carl (1923), *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, 『一般理論経済学 1』八木紀一郎・中村友太郎・中島芳郎共訳, みすず書房, 1982年. 八木紀一郎・中村友太郎・中島芳郎共訳, みすず書房, 1984年
- Merton, Robert K. (1949), *Social Theory and Social Structure*, New York : The Free Press, 『社会理論と社会構造』森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳, みすず書房, 1961年
- 森嶋通夫 (1994) 『思想としての近代経済学』岩波書店
- 村上陽一郎 (1979) 『新しい科学論—「事実」は理論をたおせるか』講談社
- 長尾龍一 (1999) 『されどアメリカ』信山社出版
- Nagel, Ernest and James R. Newman (1958), *Goedel's Proof*, New York University Press. 『数学から超数学へ』はやしはじめ訳, 白揚社, 1968年
- 中村雄二郎 (1979) 『共通感覚論』岩波書店
- 中村雄二郎 (1983) 『西田幾多郎』岩波書店
- 中村雄二郎 (1989) 『場所 (トボス)』弘文堂
- 西田幾太郎 (1923) 『直接に与えられるもの』in 『場所・私と汝』上田閑照編, 岩波書店, 1987年
- 西田幾太郎 (1926) 『場所』in 『場所・私と汝』上田閑照編, 岩波書店, 1987年
- 西田幾太郎 (1932) 『汝と私』in 『場所・私と汝』上田閑照編, 岩波書店, 1987年
- 新田義弘 (1978) 『現象学とは何か』講談社
- Nonaka, Ikujiro and Hirotaka Takeuchi (1995), *The Knowledge creating Company : how Japanese Companies create the dynamics of innovation*, New York : Oxford University Press, 『知識創造企業』梅本勝博訳, 東洋経済新報社
- 沼上幹 (1994) 「経営学におけるマクロ現象法則確立の可能性 : 個別事例研究の科学としての経営学に向けて」『組織科学』Vol 28 No. 3
- Oakley, Allen (1997), *The Foundations of Austrian Economics from Menger to Mises*, Lyme, N. H. : Edward Elgar Pub.
- O'Neill, John (1973), *Modes of Individualism and Collectivism*, London : Heinemann Educational

- 大澤真幸 (1988) 『行為の代数学—スペンサー＝ブラウンから社会システム論へ』
青土社
- 大津留厚 (1995) 『ハブスブルクの実験』中公新書
- Piaget, Jean, *Le Structuralisme*, Presses Universitaires de France, 『構造主義』滝沢武久・佐々木明訳, 白水社, 1970年
- Piaget, Jean, *L'Epistemologie Genetique*, Presses Universitaires de France, 『発生的認識論』滝沢武久訳, 白水社, 1972年
- Piaget, Jean (1964), *Six Etudes de Psychologie*, Geneve: Editions Gonthier, 『思考の心理学』滝沢武久訳, みすず書房, 1968年
- Polanyi, Karl (1944), *The Great Transformation*, New York: Farrar & Rinehart 『大転換：市場社会の形成と崩壊』吉沢英成他訳, 東洋経済新報社, 1975年
- Polanyi, Karl (1977), *The Livelihood of Man*, edited by Harry W. Pearson, New York: Academic Press
- Polanyi, Karl, 『経済学の文明史 ポランニー経済学のエッセンス』玉野井芳郎・平野健一郎編訳, 日本経済新聞社, 1975年
- Polanyi, Michael (1969), *Knowing and Being*, The University of Chicago Press
- Polanyi, Michael (1966), *The Tacit Dimension*, Routledge & Kegan Paul Ltd., London, 『暗黙知の次元』佐藤敬三訳, 紀伊國屋書店, 1980年
- Polanyi, Michael (1974), *Personal Knowledge Towards a Post-Critical Philosophy*, University of Chicago Press, 『個人的知識：脱批判哲学をめざして』長尾史郎訳, ハーベスト社
- Polanyi, Michael (1951), *The Logic of Liberty: Reflections and Rejoinders*, London: Routledge & Kegan Paul 『自由の論理』長尾史郎訳, ハーベスト社, 1988年
- Polanyi, Michael (1997), *Society, Economics & Philosophy: Selected Papers*, edited with an introduction by R. T. Allen, New Brunswick, N. J.: Transaction Publishers
- Ponty, Maurice Merleau (1942), *La Structure du Comportement*, Paris: Presses Universitaires de France 『行動の構造』滝浦静雄・木田元共訳, みすず

「場についての試論」

- 書房, 1964年
- Ponty, Maurice Merleau (1955), *Les Aventures de la Dialectique*, Paris : Librairie Gallimard, 『弁証法の冒険』滝浦静雄・木田元・田島節夫・市川浩 共訳, みすず書房, 1972年
- Ponty, Maurice Merleau (1964), *Le Visible et L'invisible-suivi de notes de travail*, Editions Gallimard, 『見える物と見えない物—付・研究ノート』滝浦静雄・木田元共訳, みすず書房, 1989年
- Popper, Karl R. (1959), *The Logic of Scientific Discovery*, London : Hutchinson, 『科学的発見の論理 (上)』大内義一・森博訳, 恒星社厚生閣, 1971年 『科学的発見の論理 (下)』大内義一・森博訳, 恒星社厚生閣, 1972年
- Popper, Karl R. (1963), *Conjectures and Refutations-The Growth of Scientific Knowledge*, London : Routledge & Kegan Paul Ltd. 『推測と反駁』藤本隆志・石垣壽郎・森博訳, 法政大学出版局, 1980年
- Powell, Walter W. and Paul J. DiMaggio (1991), *The New Institutionalism in Organizational Analysis*, Chicago and London : The University of Chicago Press
- Pred, Allan (1977), *City-Systems in Advanced Economies*, London : Hutchinson
- Pred, Allan (1986), *Place, Practice and Structure-Social and Spacial Transformation in Southern Sweden : 1750-1850*, Polity Press
- Rapoport, Anatol (1953), *Operational Philosophy-Integrating Knowledge and Action*, Harper & Brothers, New York, 『操作主義哲学』真田淑子訳, 誠信書房, 1967年
- Rapoport, Anatol (1950), *Science and The Goals of Man-A Study in Semantic Orientation*, Harper & Brothers, New York 『一般意味論』真田淑子訳, 誠信書房, 1966年
- Relph, Edward (1999), *Place and Placelessness*, Pion Limited 『場所の現象学』高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳, 筑摩書房, 1999年
- Richard W. England (ed.), *Evolutionary Concepts in Contemporary Economics*, University of Michigan Press
- 桜井厚 (1980) 「A・シュッツの基本概念と生活史」 in 『現象学的社会学への応

- 用』アルフレッド・シュッツ 御茶の水書房 1980年所収
- Sartre, Jean-Paul (1954), *Reflexions sur la Question Juive*, 『ユダヤ人』安堂信也訳, 岩波新書, 1956年
- 佐藤郁哉 (1992) 『フィールドワーク一書を持って街へ出よう』新曜社
- 佐藤郁哉 (1999) 『現代演劇のフィールドワークー芸術生産の文化社会学』東京大学出版会
- Saussure, Ferdinand (1949), *Cours de Linguistique Generale*, Charles Bally et Albert Sechehaye, 『一般言語学講義』小林英夫訳, 岩波書店, 1972年
- Saxenian, Annalee (1994), *Regional Advantage-Culture and Competition in Silicon Valley and Route 128*, Harvard University Press
- Schorske, Carl E. (1961), *Fin-de-Siecle Vienna-Politics and Culture*, New York : Alfred A. Knopf, Inc., London : George Weidenfeld & Nicolson Ltd.
- Schutz, Alfred (1932), *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt-Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Wien, Springer-Verl. 『社会的世界の意味構成ーヴェーバー社会学の現象学的分析』佐藤嘉一訳, 木鐸社, 1982年
- Schutz Alfred (1962), *Collected Papers I : The Problem of Social Reality*, edited and introduced by Maurice Natanson (Phenomenologica Vol. 11), Martinus Nijhoff, The Hague, 『社会的現実の問題 [I]』渡辺光・那須壽・西原和久訳, マルジュ社, 1983年 『社会的現実の問題 [II]』渡辺光・那須壽・西原和久訳, マルジュ社, 1985年
- Schutz, Alfred (1964), *Collected Papers II, Studies in Social Theory*, edited and introduced by Arvid Brodersen, Martinus Nijhoff, The Hague, Part II, *Applied Theory*, 『現象学的社会学の応用』中野卓監修・桜井厚訳, 御茶の水書房, 1980年
- Schutz, Alfred (1967), *Phenomenology and the Social Sciences*, Martinus Nijhoff's Boekhandel en Vitgeversmaatschappij, 『現象学と社会学』深谷昭三訳, 三和書房, 1974年
- Scott, Allen J. (1988), *Metropolis-From the Division of Labor to Urban Form*, The University of California Press 『メトロポリスー分業から都市形態へ』水岡不二雄監訳, 古今書院, 1996年

「場についての試論」

- 嶋津格 (1985) 『自生的秩序』 木鐸社
- 清水博 (1978) 『生命を捉えなおす』 中公新書
- 清水博 (1992) 『生命と場所—意味を創出する関係科学』 NTT 出版
- 清水博 (1996) 『生命知としての場の論理』 中公新書
- 清水博 (1999) 『生命と場所—創造する生命の原理』 NTT 出版
- Simon, Herbert Alexander (1957), *Administrative Behavior: a study of decision making process in administrative organization*, with foreword by Chester I. Bernard, New York: Macmillan, 『経営行動』 松田武彦・高柳暁・二村俊子, ダイヤモンド社, 1965年
- 塩沢由典 (1990) 『市場の秩序学—反均衡から複雑系へ』 筑摩書房
- Sked, Alan (1989), *The Decline & Fall of the Habsburg Empire 1815-1918*, London: Longman Group UK Limited 『図説ハプスブルグ帝国衰亡史—一千年王国の光と影』 鈴木淑美・別宮貞徳訳, 原書房, 1996年
- Sprondel, Walter M. (1977), *Alfred Schuetz Talcott Parsons-Zur Theorie Sozialen Handelns; Ein Briefwechsel*, Verlag Suhrkamp 『シュッツ＝パーソンズ往復書簡—社会理論の構成』 佐藤嘉一訳, 木鐸社, 1980年
- Strauss, Claude Levi (1958), *Anthropologie Structurale*, Paris: Librairie Plon 『構造人類学』 荒川幾男・生松敬三・川田順造・佐々木明・田島節夫共訳, みすず書房, 1972年
- Strauss, Claude Levi (1962), *La Pensee Sauvage*, Paris: Librairie Plon 『野生の思考』 大橋保夫訳, みすず書房, 1976年
- 杉山光信 (1963) 『現代フランス社会学の革新』 新曜社
- Szamosi, Geza (1986), *The Twin Dimensions; Inventing Time & Space*, McGraw-Hill, Inc. 『時間と空間の誕生—蛙からアインシュタインへ』 松浦俊輔訳, 青土社, 1991年
- 竹内外史 (1978) 『層・圏・トポス—現代的集合像を求めて』 日本評論社
- 竹内外史 (1986) 『ゲートル』 日本評論社
- 田村信一 (1993) 『グスタフ・シュモラー研究』 御茶の水書房
- 田中茂範・深谷昌弘 (1998) 『〈意味づけ論〉の展開』 紀伊國屋書店
- Taylor, A. J. P. (1948), *The Habsburg Monarchy 1809-1918, A History of the Austrian empire and Austria-Hungary*, London: Penguin Books 『ハプスブ

- ルグ帝国 1809-1918年』倉田稔訳、筑摩書房、1987年
- Taylor, John R. (1989), *Linguistic Categorization*, Oxford University Press
- 『認知言語学のための14章』辻幸夫訳、紀伊國屋書店、1996年
- von Thuenen (1826), *Der Isolierte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und Nationaloekonomie*, Hamburg, チューネン『孤立国』近藤康男・熊代幸雄訳、日本経済評論社、1989年
- 富永健一(1997)『経済と組織の社会学理論』東京大学出版会
- 朝永振一郎(1979)『物理学とは何だろうか(上)(下)』岩波書店
- Tribe, Keith (1995), *Strategies of Economic Order*, Cambridge University Press
- 『経済秩序のストラテジー—ドイツ経済思想史1750-1950』小林純・手塚真・栢田大知彦訳、ミネルヴァ書房、1998年
- 都筑卓司(1987)『「場」とはなにか—自然界の「力」の統一像を求めて』講談社
- 上田閑照(1991)『西田幾多郎を読む』岩波書店
- Ulrich Witt (ed.), *Explaining Process and Change: Approach to Evolutionary Economics*, University of Michigan Press
- 驚田清一(1999)『「聴く」こと—臨床哲学試論』TBSブリタニカ
- Whitehead, Alfred North and Bertrand Russell (1910), *Principia Mathematica*, Cambridge
- 『プリンキピア・マテマティカ序論』岡本賢吾・戸田山和久・加地大介訳、哲学書房、1988年
- Wittgenstein, Ludwig, 『論理哲学論考』藤本隆志・坂井秀寿訳、法政大学出版局、1968年
- 八木紀一郎(1988)『オーストリア経済思想史研究—中欧帝国と経済学者』名古屋大学出版会